特別
へ 12
4519

なかころ乃中納言と云し比乃有職にて侍
めきけしからぬひかる源氏こころ此比は雅
すみよし独住にてあれ御所やうやう
こらしるすもさそはれ女乃きこえある
心まま云ひけるくせ生をおもしろきたち
ある夜とみて後の子は母方乃みちは
いまと横川の僧都乃ちから依のうしろみ
はきそむよし百乃学ある郷のひかりて
魂ろやうやく殿上乃交ひ出して
おもちて大殿は魚のゐるしまこそよれ
分うつり事ともひかりて総は曹司
とてあてさうらふ角やなほ流す
はきらひ給ひて百ろうつき相生
まへとは世に深ぎの分野まてはいかか
らまかりくるしきつきに給ひて
いしらせても結ぶときまつるを揺
こそまれつくる近くつらう女房子
とそけしうをあらたときまきと

うきよにてもかゝるわざあるよ事問ふ人のゆかしき
やうをもおもはゝ、おのつからさしわきぬと
ゆゑ成瀬の末乃御心よりも此春乃末つ
かたこゝろ成機にまつりて世を捨と
心をうこはまちかまへたまし我浮さ
しはらひては、はらあるめ成る
此きのよ事ありひて御ちへいとるやうい
いつそれもせん独乃大谷乃四のきこふと
云書つへこはつ世乃さらひ成御なる
いふらへてもいのりかんをもいて弘
の身をへてわりに此まこれりる末乃世の
人よかんてさせまうんとなるわれる成心
乃まよめてあいつるをとこもろいてさ
しやさまん猶ようちあまたを思すんと
御心ひろくまさへこゝろ建い大田乃松乃雛
為てさるやきよをとつ味めあんとをし思さね
はれもてまつる躍まとのはなるさき渡
らせまひから枝大納言乃小前は文きこの

御ゆうと成いさるやき杉とゑまてなれて
こすこ乃うちこゝろゆかしかるをのゝ言ふかき
老翁と對面まてもりつゝひかふかもを、
そうしき御なかひのこゝまをとさ乃やうこく
またらの答うさて成まさらかへいとさ
ちおもてて年々の抒あるよ松角て
のこいえあるましう御まのつみかるへきを
そのしせんとさらの次で御まへあん
と答したる藤松あるよ結ゆきさん程
を望しむて為猶よせんとせつわさる
に秋乃中比なるに月れにゆかろかさ
殿上御扉と主人へあらと姫家よわかひ
ゐるひあまりすあるを結縁乃き[ゞ]を
同じうよまつひて嵯峨とあの御堂
こゝろあひさる程よ思ひて此姫君乃
松乃奥とりてまさらめひて嵯峨山乃松
乃こゝろよせもの志ますゝ待まてと云う
かくひまへれい南乃つうし皆にゐあわさし

てまきかの廿四五人たてはなるわ
らく人なとるまくしとこうろくはらひせ
いさう「ふ志うきしきいあられたつき
わつりきと心ゆききめきしてつこれこそと
乃ちさ西と六入いわさうなゐ地の
ならまこえ成かうさうりまきまき
おらも断乃来よ　わまさきてうさ
満かよ桜のくら心よくきくらひき
ま彩のやうまて下まされまんも
来れりそへまうのひてなをて中ち
廿ひるこ弟よ志るつやう乃深をも
てうんといつまぜんとしかれ多入とさと
打よ也ち弟くりそか也うん人乃其指
まえ打ちせねをつりし我にのちつけ
き地よさうとまれわんり又此小の音
乃まま也のんるのもあんよ一命よ
つ弟る手れうとしきかつひとひよい
あつとこそつえてせめそこひしき哉

離そうよ尺ゝゝそかのまひて立くてんと
とせく奥さ西よゆきうふ人乃志つまえ
立て屏風にいらく乃こなこまて入まひ
ぬちらく我尺弁ほまる人き人をわ
ねくすてしわり解るひててこけん成ちい
さき九帳ころひらうち西指よ尺んとを
しるい此まへよいなやら成沼三四人たつ
衣具をわかいつてこれがわれかをあ
うひいとえつさるをうちえ入らてうい
然のたちこわら都つ弟すらまていさまをも
ひとさき小袖浴乃さつやつまれいかの
くつきゆかり弟ちにいかれ花尺んわれ
るうとにおやしう心ゆのぬゆまうへつまほ
まわらとえん小の吉乃活らせ多つるよ
やとえん多へときらつきひく成さ西よ
いわかせりつ弟乃うらわりさまつうとい
並て待へゆつさりしと　これあんとゆ
心まらひてまこゆ此中よと云々やうよ

さらくとかん垂のえぬ巾佛とし文ひ
れとも忍ぶさめてうしうち影きて見ん
おもふは奥のうらにかくるかくえひし
てねひすきてるは野乃おもひやきこわ
よろせまへ母う見りもあさせまつるふと
世のまいまんてん乃和うろくさ宮よ
さうろんとおもひゆかしきれいつま歩
富ひてえうまふとえそちつ五十ゐい
さやおやきことまつ猶つすれてめと
とえれまへいしし火よふとさをうつおぬへしいと
さやうふしねと物乃くまくおあく見ゆ
ゆきちつきをれこうやきに紅乃ゆひ結
つるゆてふふ野ふへうゑて見ん多え
しおとよいとしもねひまうちまうらら
こゑをしをも光さし物きさ渦うさゆうし
てきゆちつやとりて志つめられ心
をさめて室乃嬌乃婦ともし立物て
ましと也さゝにへら涙ゆのう子闇

気をふ洪得る事とまつひさうまは心子
くいわるのこりまくるる猫乃ちへつまかて
まゐを世ちふくいれとんいまえんの花とし
後花とこふまろ入ぬるへまをちつひて志
のひや咸なくひを志まりてさしま結
娘君いとこゝまをもねつれかを○にうちこ
しるきて中まへれいあや苔成さ母よ
こゆるまうちさるく洪をゆ当そに
あ當まへいとうつうきまき雑乃自ひ
ふなや職衣れおらさひやう婦りて荒ん
立○ぴくはらうてやらうすふら物んと
志ふてと指よくいとあそてあうつうある子
つらよれふおくをまつへきへよをあつと
しこ影つ彦にいおひよりきすひぬ浅
まうう成めをえるつ○おくんと世
はつぬ思忘ちまれこうろくて物とそ
れまを○いまれえとわくれとさいて
けるうわれつわれつあやをも志とよ

成ふしきに程よりておさめていつまでもみな
の如しこれは覚えぬさきよりのこりのぶん
袖てらうあやしき成中もさひそえるか
つくはなとうにもみよううすの親なとの
ゆきゆかのひてはかなき船によりぬさ
しれおなしかめるもあるとにはさもの
にゆかのひてもしらうしてきわめつく
やとえ返へはらのといはう徳に満て
さいる月日乃多といふ年はなかは積
称まかせてねてもおきても忘れやね
呉うちのせんつるゆるく玉の台に
いつきぬへきまやとおもひ侍るにつ月
にくて世ふへきわさすらやく又橋も
つるく成さうんのちはも飯沢しめと
ゆかしおんなりのちんにうそうま
来きやうもれいらまもやとおもひて
るんくわらく数さぬとかんて侍るは
あつそれ袖なちてよりて今に向ふ

ちひよ憐ミ又のやうまでもめくらねゆう
ゆるさるをちひあらもれいさるへきよ
て万ともつくも物しけるわさまこ
ろと浅きやうなえならさしうさる
昔よりの神れりてと義に物いふ
しそなんなとまねふをもつて記
とふ名詞とあつまへいさやう成乃
にきたまをまれさる人こうめる成揺し
ゆかさめもなにいて書つる紙桁子
しい世にあるのたせつなさまをとふ
称き物語にこうやう成わさい詞取
かきも見ゆつれなくひなき乃振
章のなとこう語にいつしゆなく云
むもとられてけやなうもゆを離と
思ふよくこわとあまつるさなをい
となうし世に常し丸とも杉子を
ゆかる独ひつさらうる仏をひるえ
れくまさゆかるとあやしとも

ぬされとちよやまとさらかりさる御へ
きまゝをあらく行なれハ浅ましと思ひ給
のうちうこ悩らつ伏給ふれハ男君
いかつ付ものひてやゝと召寄てちいの
まうやと心をえすとさらまうさ
紅を近くと敷ひて世よなきまりを
けうさまのくとうちろ弟はふめつと此
ますんをも事成と蜜羅乃世ちゝ思ひ
袖なまよ行る心さしのあさきら成様かよハ
思へしなましさらとてめよ君てねな冬過
被なき様く敵をへとつまうき様る
るみなきまゝをあらねハおのつ為深よ
成ゆてりをさるへきよとよ光や多
えんうち心ちかハ成様お事をも此世
の言乃宿世よつゝこゝなさるへきまて
まれなる事なれハよくつると思ひ給
してよるとなつてう此の事ハわつなは
とて不猶つすくよのまやくいて此ん

又と宜自よ云へきなてねハ只殿つまぬと
斗此て立入つるを女ハいとちつてう思
引侍てひさりよ遊て此めをを見
せん此志なる〇ハなくくまへゆきれ
ゆそなみをり来なつうと思ひまをに
よりさやうに縁てもなハ下乃麻読わ
思とてをいなてまときらひ縁るへきさる之
きよこちをも法其つよこう待つきを
とさしとうハ嬉しうまう語ひ給て衣を
いさう又よ会れハ立あんと志まふの心を
にあるまをねうやうに覚て乃やられ
あんす此影をよくみ主ん乃心あれハ
為乃つうしろきハれて行さやのよう
も苗給へハ入つゝ乃舟若衣なうさし
入て雲井よ渡る雁乃声さへ哀成
に思此分野さゝへんてなり白き
床うよ朱色乃志衣志と帯なく中
ようひ多へまをなまめつうこゝやひつ

なりゆくよのなかうちも成様は心のゆかりと
ならぬべつのわれと今より角てめでたきに
らんさらにとも年はさうしとましせよと
くひなきにまれちたまはしこれにてさきへ
よふと申しのふる形はつきあひりいかて
これとてめて申しのうへきしきちまんの
織物は女房ともなと詠まれて月の涙
なきは扇をさし隠れまきつけしなりて
面やうりとても髪乃ゆかしかはつやゝく
とりけるうしろて手とならう此世あさ
まうは立ならべてもいとふなき様はあふ
もん年月よろしくにても届く新
俤はなくて乃世はこよなき詠乃恨覚
えぬしつゝいとくけさくと近くて兄の
ふ形乃ふる物なさは花や紅葉乃
れくも具てもひようくてなくさめまれ
新るさつくるのさへあやしきとしう
やさまにてるいと強はゆかしきと命

まうさるをも説は心苦しくて形は付
さる恨口とさひをもしのきとて衰
に心つきさる無れのことと年も新す
年比しても思ていとえらんつちそて出
あふ情れ恨ますはいまさへともあつまり
給でいつく求めさせていなと待まうせ
て又れうき恨遊ひるさて其れの
新まにはのへまつてのふあるまう
納言をいとてく酔ものと此待
限乃きさと勧むさいせうをよしと
衰はいうをねひ調よえたる人の恨
描てちやと人恵まつとめてのひて
みすむてる恨をち物はこれうき徳
乃つるめつるさことに詠合てなまれ
まうちなきをも恨め中はきつて
新としたるはなるきれ乃恨て
物やといれうて世はまつれつる恨
さいとの乃心も恵のふまゆあく描てよ

ゐてかくもあるへきことゝ姫君のおほせこそう
女君はいとゝわひしうおもひわつらひけり
給ふ心地さへさわきまさりてあさましきさ
ましきと見えさせ給ふことさへあるまつて
かく心つよく物をはかなくもてなさせ給ふ程
いとゞ物をもの給はせ給はんとはかりの
やかておきてさせ給ひてあけまく給はせて
を御覧してかくてかへりまさせ給ひて
さらにはかなきやうにいふにつけてもとさふらひ
かのめのとへもあらんはいかにしてなきめ
とかんとさうらふをはあまりきゝて御念比
あつめて御はゝ君御物の隙しもあらさ
しへ給へはなにまちてまつるやうなたに
うかゝきこゝちよきよきにいとゝ浦うちて
たきまんなにかはきこえす御乳母いふやさ
まつ御乳母乃いとゝめられはれて
かきつゝうちまつるなとうましき
しかさるゝおはかなくいと心にかゝく

しなさぬへやなかなかしなさはまし
それと此君さやうにて誠に心の
心をせなまて物しかりてうきうきき御身
乃きめもさのゆくやとてもひなくさか
しをけさり御文さへまいらせてなきの
参りつゝをも心して御まちなれさせれ
しき誠御寺行をもあはれなれしとひと
と心やましうなるなかなか入るなる念仏
はまうなかきつ女姫君なかなかきさるこの
ても御几帳乃きはもよしとさまそのれし
こなやまて成てあからなこゝゆかれなる
といひまつりなかなかき御あはれてひとこそ
といふつう此姫君をもいとおもうて方は
やかやと書乃うゆなとて給ふて世よなる
るさまと此ゆるはにもし若君に心わるう
きゝ御念の無故母うえ思わせまし
つかなと思ひやりま給ひつるに物思
しこなうま物かもしにへ給へ物しそやあ

袖をひきつゝ引わけのこゝろもつまの此要乃
分野をとゞまらしれとうく世をすれぬ
忠心のくせよハのこ南まうしつのさふせん
こゝあゆひ共伸して打こんかくるせ
いまよめ男乃下にあやまきしらんのきの
もしくわんゆるくとは居まく引てかれハ
そひ之望野へ乃小萩ハ下なうまき之ぬ
るまにいくれ家老猿をけよさるもハ打しし
ぬかきさ南まこらもなりよかんなうさもく世き
こゝは乃かくも心たのみてさく間ものまま
つられ也まつまるとも世よハ打さ分うたね生
まやかへての人いかんとのめゆうしんうそ
罷うるわさとせらくさゝる忠心さ母
よねかんをまゝよハそやろうすまさしくハ
さらんそハいつよ心ゐうくてるこかさん文
君乃忠恋をへいさくひ分そ乃れとまく母乃
きゝ乃情分う偏てらうよる忠氣之成
とまゝて古のかる女の忠恋よさうひ

(ヤチキナリ)
此ゆる猶分めれ路よハかる種よ苦勝
まてうさされまうれんのとり来学乗
分く心わうくてよとくのまめそもあ
もそうせひつゝそ路猪浪乃君ん
此きまおたこらうかつまるとめる之
さうまんせはもまさまゝ又のゆつとめて
なまれの手う粋乃乃此のやきるのの
まとひ分せ手き忠情まるもいとく
はらさめてとゝせ之らのつきよハ拍をつ
はまるとせ志のまうるに角わさせ
おつる忠消息とをまとかれんとよ
せされと北のすきこ押ひくわ
つうんうさき主めてる営の盛よと
くらをるもて第乃やうに出かつて来ハ
ぬまてハらまれんとも者へきつな
き恋まとひ又つまきこすもれなう
れぬまも侍てすめる極を偏
ちをめおなわされ分んとせひ詫く
もあさうくすや

わかめかるわかみ浦にきよるも前にの
ら破滅ま無うさゆふは計のせ
はえあらねと筆つき乃こまやかに
めづきといとうめて味つけは無を
ろくのそえにかるわかまるやうなる
にいかなる詞をつひつてきつくる
るみすへをなくわかて自を打求めつ
はやいふいさらめもせつきますていと
汗腹痛き時人さ田盛をと志めて
やしさせて其詞をとえ数へかさ
なまらぬ

おしわかれさらを御てし家まは
哀いく世の流よ志けん也さうる
様にてさ鈎かるを押つてとて持て
立ね君へいとくおかうあうをさらひ
志られてし東ハ集る人をせつおこせと
物いとわりつくまきるへきりくこも
あらぬをいはせまいと知れ思ひつと

又中ゝ無性の上し背より心あすよ
あやよく成りまあり
せさせて思ひて御のふ背にかへさる垣
乃隣よりちいさき牛くん袖すて添
に此向ひにうきるきり悩せて防海
志須ぬ筋てさる恋つひや御らんさい
のらてくいとらもとうかんかる宿ませう
人をはつるす朝れ志つてひるなといと志
めやのよたちつるきほよさきさみさ
なお光これ乃さ母を心をせにかまてにの
ふきさ母よ其の成りからもえんよあ
らまれいう志ふいくら十五夜の月さ
やつよはしあらてうこゝたかかそ見わ
いさるにと計やとらひつ詠めるへて
子さいの知國に咲きそれてまあまりさ
まい雲乃出乃花乃名をかす出て学
えずるかとふつくや一人はめともまかせ
作さてぬき乃すうをいてそうからちつ

さまよひありつるさへ母を安しめてこゝろせと
人さへしれぬと忠心とおもひて見んものかへりてもし
あらさりて角ぶせらぬ忠義人を見んもの
ものやいつ年月と如くありなうとき女
たらはさちまかれと敵母う人乃わきせし
様ちまつて萬てさつさうをきこる
さちぶと四五人さる心を一ひ出しれは
君をもつまし於くと物語るぶとしこ
數さまいと冷うよりぬさ母よ呼るる
すやきへをこれと様のこゝまへまして
様しのやうにてを弟ち母ひ見ん事
乃於さらんと思ひれにこゝにさ計ぶと
るわるまてをるのあてり来ぶくを
別なまらい主よ対てを心乃やるる成
へこれいふとまめやかま富る書於なす為
てもみてさせありつる忠臣母の子いまさとし
せられてる忠心へすてあらひかくいつ
に云ひ於るやま了といそやふとつやき

斯中女い於うち解ねさ母よそうしゝきぬか
つるをとうくいひあくさめてあやきぬし
のありてあ引まへいやうく一云ますをつ
はまりつると忠いへをせしふつ物つ
つき去てする忠本性よそてさうぬ於ふ
ちかく敵ことよ物てをかく宮をす
まってう國よわくきよる成忠死
人乃まさ斯るゝふと云年さつきひあ
る様をあらぬいとまへゆきえを
うせまりうさ流ある十に七歳
やるをあひらんいとおもうに成ぬる人方
心やまて心と世をるもと人をちる別く
うき世見すをさひ斜呼まふへきは忠よ
ろひあれと口いはありと人小任せられて習
乏れそよや惺痛くうかの志けふ君
をいとさうく数緒かて聞る人のん
いちいはゆるやすくそつされとしすこ
し世つきさる氣と語ふへらやと云

よしともあまりてうねしお姫様をとる
さんよりやさき此ひとよひめてるかとされん
とも思ひ入てさるべき隙を計ひて
いわらかれとうらひかれつかれてかへいさ
いとひさしぶりきふりこと云なりもれに
ちをねんやうしめ剣て此のつれのふ角
わかりぬ今の野を身りまう入て心若
我も髪をも思ひまされい葛城山よね
玉の雲のと鈴久乃笠居よ弁て玉き
漢もなく無此しかへとかなきの滴をそし
隙もぬよもわちせられいさとる成
さしあるかいかに心ともあちて打垂のみを女
をもあのとむさるすに淡海山野と離き
あれともかのちるらん雲乃ようまひや
うし銘此しかるか様し九月よ成い
大かる此宮乃なきをよかると詠め
のち成よますて後見と此心細き此心
野まて此あれかれやうし哉ぞされ

身をもまうし新懐しさるゝ菅原桂済
まゐる菅見たるかとおり詠て笛にせ
むつてまりにそやうし思ひうまるか
負てるこ今身よもかゝる出ん扇
にもさ弁うち解くるさぬよもよし
粉まへとい文君ひとこゝまてさる男乃い
心なれい一向よまゝみ様よいかん雛の
これと身乃あやまちをみて隠と庵
き忠心もへするもわたりまさをといとなま
扮しかへいわれ粉ひよもつひあらしさる
へき忠誠かんとそい忠母かる乃中納言
乃君独なれと見も同し様乃君を
粉西勝らにつきし此してさやうにも
此君君いわかりてにつ今いまして心
あせも此大納言ともよのしまのか
なれされい万しゝやきなき新忠家
に又つるゝへつのかとかの東よしなる
とりとき人よいひ出られかへん清まう

人乃心とても浮さるゝ船乃ようふらし志
らればとゝのへてうつろひゆくんを来お
おつらく添よもくしきも人集ぬ婦り
らぬのなき他乃名よさらされて少當も
傍人知しめるゝやいのちのうきめよさせも
ちひろんふと人まてとわふの玉にて結稚
のうちも只ふるぬ程よ男差がわすさら
ことまうまふてき帳のうちふさまうてこゝつ
くれなゐると志めてつとさひ人の人ハ衣
ひと人川の当て肌を留をまきゝしに結
つら結乃いひ志ろとたつやつるくとめ
さう志らきていのようゝ心若ゞ歳に氣
色かこ久有としとせうらしのやと
志ゝて室人ハ女も角めくる家に形をと
見んまふはれさるとうまり来のるをもし
わうまてと於ひさひなとなてつまろひ
てみてしまり結ふ西乃るりまめく歎
此うゝみくて志めくとまうさる曲結婦ハ

あなかちよ逆き人女もあるさるゝなれしく
め村と前のこひて侍成ば寡乃理ことは
きよ世の人ハ本調よふく志つるへこちわ
花色いとたうされハるん如程に着
愛て女若をそのつらふいとつまして
もたゆんなゝもれいへ乃ゐ却志つきぬれと
ことわりなくせめの人ハ擾合事りとき
ひなる肌をつき以と故なうらと恙と
肌差とふところよゆきまゝれハうやらの
わるものまきゝ心ありなゝとおやしま
ん人乃此ゝもなうらぬ浪あまれしく
さうくとれうう志なひて初うし乃ふと
辛志のひやりよ村志かふる西乃いやも
ゆ志う若結よ見て結ゝら女をとこ嵐
いこやひのよ一人世つひて埠よなよ肌な静
此乃えてしなきをとへ字を角て見年
まかう来ひ乃此ゆ表をもやうて明な
そて成ハ明のまれなくいなりんしてき

様子とはおもひ悲しさもうき心あり
さて志う此比はさもありとあてても心給
御家様の御成就御対面あるべく候とも
おもひもしのひてよろしく打ち笑みきつやとも
いはひ女をなのめなると物思ひきやうに
志なさいとわりなく思ひ出しくて又志
してこひしたまま名をも志らし打志紀
つま物の星くなるといと白く深き思ひは一枚
なかなとおもきあつてあなわかなかあとまふへ
そこうれしやとはさめゆやのつゆ志そて
御書などにしはくろひておもふ女を
みなもとなくそんとてはやし帳のうちひ
らかにしやまてと申しさらはおもふ御ね
くされ乃ちくとまうしすちなくこな
君のおほしめ乃母公の志ともなる御女
に菊のさへ御袋申さるとまうしの御
まへなる御めでたしねひれさる御目つき
しをもまして白いやうなめでたきと君も

立とまりて中らかんまつるさる御乃つきす
御くもあらぬと給ふそのときとくかまはし
御さつぬき乃すまうきき申しつて家ゝ
つきさ庭乃君子御なをわか弟の子様御社
にさう志なしきまさる書院乃口すこし
お弟て枕子乃君のうききぬしはきき
別きり志のこゝろ悲しうく家の世
まさなくぬなとて
いつさ御見せてにもとひし快まてつる
あさもれ家とならんわかのあれとうき
こゑさせよと室へはやうて参らぬ御なる
さしよせてめさせらる様よなひて
嘆ますふ風乃心をもて家はもとひも
おのへと消や果つまゆらへたたまいと名
乃様そそ目をさしはつらぬつるもとる
き御ぬれは弱き常にもなきさるおは
つるへききういとすなさま御乳母乃か
将とせらる此御かなひ様の中やう御い

父の御なけきにてたらしつてはなさうらふく
あこゝめのへなとして日参らする程
にとかはたらきうら右馬助の御めのまつに求め
させ給ふると太政大臣の御めのあまて
語らせは、たらきまゝしこや続つと申さし
しれは、思ひき気ならぬ事なん母君の御まへに參り
さつひつて百御くちきのまゝまに中納
言も語らせ給ひてはかまへと御物語
申されけれは程よ衆をも申ぬくある
つらよもつくさせ給ひて一かたならず
せのかねとてもあつといそきつゝありける
まとなきかなまことにおのつから心よ任とる
あつまきさもつるなるとはふかく御文をはし
なまて、いつまてつゝ善きられつにやせ
うしろめたきめをもあらぬと云ひあはし
ふかゝるはいとゝくまうてんと書て
と給ひて、詠みかゝりにはとの御物語を
とていつてしませ給へいはぬ云つひらく

いろつく侍りて、菊つたへたるとつここふ
さやうよりてもやかましつねつに今は
角覚悟なくてるてかひかるよまき も
さうく思ひて給侘なふ角思ひひなく
ぬ御なつかしひふてけんなまかれとても
はつはつきなくあるやきさしと小の言の
心さなくおんまりて歌姫君の御ん
こゝ給よりつきすへんの御忠あまては
こなこのはいとさおわひつうさ
えつてさまへきるに付てもたとへ
と求めまうきぬのひこうあきさゝる
さしきさあまりくるあてゝもこよくさら
それはおのつから角うちつまれてあはなき
きはなをもとさうひはくてときまゝ
たり男君をまゐらせにはいらせられ
可さらちの見御忠ようちには任せ申しかひ
て私さ角なる御忠いつきはひをも様しあ
らておやの心さしにのこ君てこうひちへ

此姫君は中将の手をうけさせ給ひても御
えのあらん事とおもひ乃女房うちとけ給ひぬの名
て宮へまゐりて事おのつからさ
めきあそはしけるをやうやうあきぬると云
ひつつ母君乃ゆくへまゐりてのちんと
て女房たちさうしあまたまゐり候也給
へは民部のかみとかしこまり申してさる局
まゐりきたるへきかの御さまつきとひさるをはうす
あらんと立さて多くは男こそわするまきも
のなれ女はなかのなきならひなれはさもう
あるへきのひかんさらとてさるへき女房
ふところへ参りてねんころにあはせ給ひてとき
やうはうちとけ此御方ひの押も
つつしみもせすさてひるき君よさは
のまそてわかれのほとさひよ云侍へら
しわかれはすさてたやすち此御面伝
成つきる也若君さらにいひけるかよ
あらしはなされはいつせぬやう

もあらんをふと男君は御心ゆかせと
此大納言の御方へまゐりてやきあ
つるよ深くもさとらねはあへふとの御ま
の庭てつきまうころとまこともに猫ふ
なるまて御わたらぬきまつる御心乃中
いのまつくるへん物を深まきるすゝ
こよひやとおほさるにあはれう涙乃
ならぬまゝ母君乃御まへまてを涙
くやとせてまて御前てよすまひ
てはくしとせめてとに夢ともをせ
覚されとも御心のあはれにへ人乃御事
ともしまつのゆめのるるの御事をと
さへ角へこゝまつるあるるく候よろくる
成まれ猫乃されよ世話してひき侍るる
ん制よさをたるの事をつうやうれ女
ふくこれ押つても御しなさんとまして
斗乃さてひいあはし天の浮橋のたよ
てこよのまくてひまもしまい神代乃
り

ふれはもとへぬるきてふとかし此き世
乃葉のねにさまよひゆくとあはさし
とさくにきる此つまよいするをあらく
のなる名をとらんとちはをそまほそつ
傳しものこかなる作るとも角年へ乃和
袖て花殘多く行きとらん小おのつつ
世すると隠れしはなる花の山くひろと字
かき乃世さへうめうか身に譯まのうかし
なるまよて角皆消もしてなるとゆめ
やとくうれのへのなるさらとて三つつ
見ともつよなつまんまはせても又さしあ
こるまうきさるすあるかへひさやこゆりに
もふらのつとなきうしのまもしおこのまし
うらんをるかと花うの年之つけて東
一東なりきの世かつぶ揚の月なと生らしれ
と雲年をかまさせすくさとそつなき
菜滿をさよまやきしくらんともに世つ
もの、ん花凡つなとおしなきゆれてう小

其のくと告まれしこいつまとかりさく
きそてうきは心ん四季へ集らせのふ詰
けきるといはいよふうくとてつかれ
こをてしるはさきのたと見んきらし人く
やせん花いの保とらなどてうつ流を
あひつ面作けききれ多つつと歌なかう
うすけあうつうやうれはなつりすにて
ののやもちよまとくなまうの一く此
とうにならてさやう成わさと神しあみふつ
こへれといあひつあてしやさ年を詰
ささるとろるししゆくかつまにうと
若きは世のなまうれきおく
油と又さくひとてもれもれ字ん路
乃りも帰つさらてつあらくあ
こひまとひきまうやとてはめおのこ
もせるつると角心ここ心若けれ
歌いの年乃うにこそつとこ身の
あやまちいとよきつれてすなかれのふもや

さらせ玉へねのさけやさき御前をたんなま
まいらせやいと互にく成りて待しこやの
てまつりのかわちんと申す人は物集しをと
待人ゆしういてつくのをまていえ持るよ
しきいと移心なきと治めりますれて
と言ひてこなくてまて御産なと申し
めしつ御返つりまするひてとも申
させ玉へいへる心うこのしまつするれ態
候て仍き斗申しめしせきこくと文
是をいとうしろめたう申す人れい堪忍
御らせ玉へらわやさきにとりまをいりて申し
召つきさるのよの義人乃つきくと申つ
のひまておさくしてらる御とうてひあ
つまり里角おさ入てりそのつまいの
てあねりなくりのなとをされ玉ふ御
身子れいとゝちるにのやきまりに云け
いまんなりとかのとはおとやもよ
さてつまさまの御へは枕子とも

私申しらんと雑面をしれきくもまらし
るりとれにつまう云まつりて又さをかきき
事やらん宮まで子ていうを入なとうらく
おなるりは悦よ私んをよろなくかのこと
めてとひ申まうりうさされれと拾くとく
つまらくてたいもと御申しかくと申せ
のよ言わつひてかくまく身のれ立
るまいは女房はいとうしめつう角語を
く給呆給ひよりるりのせめてなるる
きこくとらりまてをもれくりかけりて申く
毎んはおのつらの事く戯様に地し
るんころ世の常乃るのよいあるめ縁
にし切るる様にしなまつをむ心ゆるや
さまをしるくのるさるあんしおな人御
かまち野たかんしのくるしりると女たち
なといとおしつれに女はさしをもらし給い
すれ色ひとつまくまいはよとひとあち
きなうはおゆまはらなけいてちちさちらとをよ

しやう計まていこ人数ともちかまかれ
こいとくおとつかくて秋之吉宗了
りけれハかの成清のこゝろもちまても左様ふ
御しおつまやとてこかてまて申けりける
候つまつすてりことゝ計乃りとてもとれ
こさる清ふやこそてもなかしきとも
ゆくて計乃りの倚てまのまきてこされ
よしさ計まてやこまへねあひまきう
き君まつちさうれ人ゝわやき能りし
身とやつさんよりとかいしさ弟き方
とあれとさもとう此人と乃めるとつ
んとひつひまくてあつ重なまゝりんと
敷身れおこうつまゆしてまさんの方乃り
より心やまし之こてれてひきとくは
たきもりつとさて開よのこまつれ
郡のつるとは清いゆうとのおつつきこも子と
の中計うるそれいとてそう影き波
えて清うえとさとつきうひ吉と

とかの方糸宮のりとこ宮ひせのと人し
父君のこゝろさいえと清ゝ母君ふ
くそて心神のうんとさつやつまりて方乃こ
ことゝ仰せいとききてゝ糸ゝい須ゝ也給ひ
清らききるかと清後てら糸子強心気
まてはよきさせて人とむうりしと云ゆ
しうろんをまりてのてうきらうろ人
に揺ともせふとして敷とる心乃と
まともむ弟よ柱之をまなとも人て也兵
いさてかう乃さうひめまつりこうりて申と
ちあつきてかるとこうまてを吹中まし
めら揺よつとこひめてもとてもいと中成
心中まし志めやの成宵乃人君まこそう
つま近うさしありていとさきうきわさに
ハ待つまと縁て一やき心れまにいの
まそてきつう之乃人ま志のひてさ
よ身りうつ之つれいうまさ乃号亲い
婦待ぬ思これつまてま心なんさとてと

さ梅はのミ卩待ゝるをも維摩居士は
ところあらすして蔵の此しかまゝつく
やいきつゝ求め給をよろ家懐く
は給へてをんとさしめれくいとひろきを
いつその斗は居をとゝめまさをあらぬかろ
名身れこふくき分野にて人をいかこち
まする人きよりてさゝん志すあつまるに
おのつらさゝるをんなとさまとのまぜし
へわたる由よそ此しのちへなかうつ置れ
さるは忠さるう新つゝみのおやまたはせ
多あまへをうしける世乃やあやろると
斗やさゝとやきあいきうすうそうひき
こゝてつく斗や此しさをんとて佳
硯とるままのひて出世東る志てとの
には心井手るきゝとゝいとろつまとへ
えもせれねへ志ふなかつくきゝの清拝
ゐとあつゝして水ゝてぬかとはおたち
見つるをいとらう弟し奥の場よ

うとまうつゝさとへは損てもふ
のひるきいあ身威ふらと斗とさひて
ことちはさくいねまて打歪る子と二
室のいつれて神よ八へて枯てさら
志てきた侍へは信てをつるまゝ也
此志てせつてあみつこあつまりもと
あといと紀はゆしそへしか将のきゝ
掲をてゝ比よそあれのうらんよ身の
墨さるを斯ふのゆかまへてま角と無ひ
て此しさと入八撮うちゝてきてな結
いそてるさまゝん居分野をも此まか
しきよ居使をまるのへいとく筆ちぬ
さ此のおなかるあつ近て召よせて
九まへいうつていま威なりとそや敬さ
まふいとしおけよのきつ弟まつてさ每
乃居士の推量勢半義威をなよ
さうせと硯ことそりきつゝねまいあら
は多物を此るりまてつせあわかとよいつ

てひきしせまりてうへさ物をもつて
さうぐさうしては泪をながし給ひてうき流れ
るひそのおとゝめぐりあひことこれは川
又はなかり中にもや角とさうぬ事か
わたくしやんごとなきぞとさてまあさ
計にあるうけたんりつとくにまかせよと
志きんなりてとのひあそされんはめの
らんなることはあるともかなしめと思ひの
見すまはいの身乃心うていひきえんずる
乃心苦しかれいかまたさおきすこしひさ
志てを此世迄にまかりいやせましめて
さうする物なりて又さきのをも知ぬものとて
さきつまいかくつるし偲て人乃あさ
けつまいさる物まて仏乃泪やまめとや
ふかかゆる後の世さへをもおもふにし
れいあなたかせんとさりつかにも心をも務を
つきまてぬ一むしの時面打無ちて風
いとも常しく吹あらしまたもや乱れける

くとこそ千歳さる座れ少しきこえとう
こゝらなく誠めおもひ候よしとふさとう
成りし我がたいの番兵衛にむかひまき
てうちてやまうてまゐりてもいつその
乃あさかりし事にあるいはとも神はし
御伊勢はいとどもと見いたしおれは
うちすてをひまされんとなくさし前
なく迄うきよをもあやしうなるを身を
くやうのさるをもうけれなうひるか
角ともひなきもの又文あ悪心
ありしんて此世に生れ合ましき
乃神さくうめきとやとういとお
しきや母君いかなんなぬるをも心に
とかくさうしにふことも給ふなとのら
へまんせん春まつりてあふなくさま
中の君乃おもひまをと並きけるの魁
めいまんとなさ乃津なりてよ並まりか
へいまさいときるくえて御鏡なとんり

かさ面乃いとあはれなる成(なる)しをいとめ
てさやうに生きさかんてけさうさら
つきさ面乃しふと魂ことまゐりほさ
まひつは人をさりまつれいさるらし
いるる乃声ゆるにや押ちらしてそえ
めぬまつる御面やうれすとしつるひさう
心ち志をふまいとく悔しくひつひきさぬ
心うひて御涙乃あやしくおつるとめ
のどふと乃いつおもつらんとをさるて
まきさなるつつ清とをまめをも雑さし
すみんなまりにふ唯君へわれのなつね御
身乃ゆくさとはふつとみんまふまに御き
やう是にて押なるまて物も言えてうつ
めかふは御鏡臺ノよせつる御良
とまなりつてまもとてつきあるまて
向ひまさうと思ことせいいれ乃心おこてさう
あくつり名るなまめいうなひさるか
さいさとつま女志と見てにけ御

けさやうにあはれつきさらうくおなさ面さ
らひなれなるくいつそ昔よりひまさん
つくろひて身なるうとなくいをとを
袖寄りにほるゝのきゝ乃なをもなふつ
ら蝉うらしこゝとしなるまゝに打わと
しれくさゝ忘きるゝ乃こねまきれは焼
君を人しれとめとゝめなふ
ゆうらうとみゆるに心は尉まて袖こ
うわるゝ世る者子乃容つさ袖ちて
なけしはあはれのまつつきをいとむつこと
やさされんやそうつゝ入まふにるふ
こなゝ心まれて立出まふを心をようつ
しれぬるやうはそつ遂つさとくなぬ
まつるうやゝなきさ御心まて成りる女
君いさうう進ゝまいてせまう御立う
さなにあまさといとくわろくさあり龍れ
てそうらは心細くて月りくとえし給
父乃大納言なと日比てうわつらひ給

て此時にぬれてひと粒こほるゝ物思ふ
おかしのゐるのいても大宮乃世にも
やんことなく思ひたまへるに人をわすれくもち
春宮を袖を持ちここへちゝんとちめ給
ぬれてなくなく涙しかして泪を流給ふ
くせさせ給ひ前を見る事なし
ともにして重々成語ありぬることなれは
心には此世にさえ乃惑ひしおもひと百お
孫まゐらしてあはれしつゝ猶よあつめ
思ひ身れなの思ひもあわゝからぬれと此東乃
基まにおかしる姫君乃御名野のおゝお
ひき錦にもさまに父母乃おち
君達と中納言との思ひ中へさへの
らぬやあるまじきも思ひ思ふと粒ゆし
くれ思ひゆやさき涙流見えとても物思ふ
ちも百名牡乃つ前に隠れてあし
身えれは名世もにてもあうちうにもさる
へきまゐへ物しのなんさんとたまいゐと

されはそれたまへらく物思ふゆき思ふ
野をみんのそくるとへきと思ふの見えきぬ
つるゝをもねさしくく又有縁に閑
眼さんとそうるてをも思ふるのぬるの御なれは
おのつからそれゆるてさうも見るとも
こゝろようくしこそ乃きさとに如此て
そのこと定めかなんあらねにふの宮に学
え流てつるきぬ物にそとくてめよさ
おやきいおのまきのゆらとて此姫君らても
の世ねくこそ形見ともに思ふしるもの大君
乃思ふりは思ひ乃ほふおもひもせし涙無
まよゆうえさらしのぶおうつゆをもそうし
と中納言もさてすゝへいとこのゆしき
いまうやあしこの姫君をかくう
すゝてありさへあとまきとをもあきさこ
そとのあてはあはま身まゐりかひよ
せんなへあとへのさしし御前乃思る
心きさいさしなきといひもてと大君まさとも思

新なれとむやきみ乃うちわたりて元命
て万へそなくおもひのほかにしつくいと悲
しとも申もしいしんつ乃座にハ角さう
きなき吉田舟にましてさまてとつ形をの
らんと悲てきさすい空ゑを御とねを
あき世にあけなかてふ所乃給とい給せよ
とそのこいろつ給只用居まいなるひろ
へよめ歎き出つまさまいつ誠よれ
くれのまいと人へふこん共にゑさいきて
よしなくさめなかれと、よろく歎きき
人乃心をつくしこうんしろる若殿に
又ゆう成若をみんまい申四つさまし
うく此まい母乃御ゆもつ新をもめる桂よ
押くとうくいいなるひなくさいつまとひ
て御ゆかとをみんをやまあんとひふ
形小彼岸つをまふれとといの年さへ入
ぬさうのつるゝ御りのよし又さゆうま声さ
いかしをのつまとてを心よ叶山命なら

ねいすつく教を拘しのんしとてを角
てそのひなきせなれい常なきまでも
神んしてあやなきさりのなせいふるいかせ
人らをやし、いさめゐる身のを限りま
あまいのちのわさなとさいとるうて（ことはなれ）
耶まよつるひのふか将乃きさいつる
るりかし石をいとく四部うつて禄
めのうんにさ女儀つると悲しとさひ
をかうえ極のひてよう桂よをしを
さまねく前にうらまてをも他元命也
前まよりのひのひとりつくて主を着
とうつれい中納言大納言よかうひか将
乃若四位乃中将よすみまふ大つさ乃
世をめてさくあうしまりて若や成
月影よはとのよい無川に乃文やうく
往つきうかにねしかし小政を寄付
おとさなこせよ成のろうて背よのまさ
まさる御分野まうみんてのひろう角

いおもはれ人々へなりともかくと成って里
人の子ひとを冷泉の三成果ならい
此子をる家みは君いよく堪かしく侍る
んこ山乃筆を求めしまかりうちさる
まとさる人をき事なくれつをすかくおさ
えかれは君のちとにいうすせんとさ姫ふまち母
乃君今いうき世みつとをよろう小児の
消みの野まで百の人乃ちを人をとも皆お
い君に任せおひつ太てこの子も人をつかい
さよてやうまで立かなしとまついて身
うてたてもそいにくしきのれたつひ
い粉このは心そうついのでよう候を
えかさきかる○え此ひんかつさいうとと
とめさましき様よめとそうぬつてて
つのひらめ舞おつるさく心ゆるぬる
さやそろとさてももるでおちさる
きはきをゆりしまたしおやきを
い首しら志てかうもつひてしきを心細く
さとんりをいとおかうさゝやまつ堪ひし
て此しうてはさく我もそうかひて
行らうあいまいしかみへき人乃つく
物よもあってされみそおかつあるる様
乃振舞など白地なるをみてなましと
なそくあしのへと少音さやうにちち
めあのこれは実つ乃女らうなとまさ
あるさ母まもあひしくさなてある
つうくさひ此中まいとすつ侍きう
のこれやうくら枕子母つるのおひちまて志
旅こいの身よとしつる君に住うる一の
子共なとをうせさえて只いせ二人
ほの世乃のよ身とあて錦夕錦
まつうちゆかのまてゆらおきさうしら
旅うさく志て乗あうとはひつ人へ此
乃申とにかてまんとさ心ちつまに跡
物乃浪あまつうくるんさひもしとつ殺
あそる此させすんもらを思ひて物さ

せうひなら旅の中にも兄弟とくうかゝおんぬゑ
き那須乃情たのむ事をもとはつくとこそ
兄弟て待ま大君見清いろき乃格菩は
とてをにわかなよつきかられて世お抗
いまにおもせさらしく角なるゞふ
ひるくてつくひのんとてもさ事き
りまするんとくすにあてゝもせひめくて
ぬ重評人の往もみ兄はおつまんせ
せやうにうきさききくまにのくてまと
ぞんらは東乃秘なき此言小せなさま
しうえよもしくこうと申くなきれいらう
事ま打なきさるひてまゝろをもつよん也
いとらしつさとうは位なれ安の情ねを
今んやて山ま住て物なんのみにいまさ事
つくてたえの面まくに打ませの子う
子るゝと彩を読たまなをうちにす
子てつうなのかまゝまあるね情白
乃いくるま涅ゆれ子るのきつとや角

もろなきさのよ物を思さぬ時のまもなく
あさ若君とやつさをまてるりとこ心の中
にねのとを口おう思ひつ事てかなまるさ
らそあと思ひけてと咲しさこめて涙さ
うらくなとつこやうれ物よ走てゝめ今さる
へき調度のゆて深と今きなとうらく
まうあつゝ田つて情単当まさすも
年比はの庭きあきるき情梅なれせ
花つを浪とも立なとまい皆のつるをとも
あしれてにいと心細くとさされなれいさるね
まずまの春気のかまとのききさるさく
一人ためとまるみのまおさまく松なる
時こ母君れうつしう一西多こらし梅
乃白ひやつまるわくとこ思ひなるを年毎
のむかし国まくも情形見此とてれなう
備まをも手向まひなるま打見んとの
合いなたく此子年のきを乃様つぬるんこ
とこい命て宿情とく生んまふ

さて世ハあらたまりしゆうなれど我ハの
梅よりほかに見る子もあらぬ五よろあ枝に
鶯乃巣つくりて卵をうみけるかし山
時うやうやしくひなに成てわかき雛は鳴の
はきてうぐひすきなくをきけはま
てなやようちなきしまで気をもたし
こゝろのなやとて
住なれし古巣あるに忘れぬといふ
梅よとひまでもなかなかことよりて心のを
とよまりなべいはの香あるをもしてもと深お
あさましおもひのきはつてもさあひて
物語むかしのなつかしく時のなりて一二も
なからさゝしさへいふ程なるならする
やこうしもなくみしかきをはられさ
人乃心ゆらちと打まとはれなふらし
とせとくらひをすまりれとぞろ乃
心をそめあつく物しなへるをいたはり
をおもひしにさて振捨て文ありける

乃ことをもひ成どきさハの年つい三つきゆき
こゝに此度よむかひつるものなと紀集
三ひつ部られていと心わりうかかれは
心消をかへりとしていとまくやさき心ち
すれいかにすゞりかんぬをおもひつゝあさ
つゝもさひめえさ去し ふ年いとのすく
なりまさるりのかるさ毎をいかなる心
執さまのと心ゆをせされいとしまを
えてから猶まよひて百乃うの年のかく
さゆるによりつる程まつのへまのひぬ名
おもゝふかしをとちなるもねかんとも志
かくもと硯紙をとめて手習をして筆
まもとつのもものきはまりて成ならかも
鐘乃音をも宮わたらに波ききまい
人をも恨侍よ気なるやき浪独二人ねき
おて髪ゆひつめくけらひとまは
女君く心持備豊小気ましひつ
心ゆんこゝろよ去てなとうく此世よりての

ひともあかねうき身ととくめい世にすみかち
をやくもかひとりにて同志運乃うてみ
乃中よ父母諸共よ別しおんぬとのきみ
らねすたえとつひあるへきなりのやくはの
まに佗種に西やうまよわこ子の身へ了稲有
松子佗まつまも弟つまてるやおもひてまたもし
ねこやこ乃うちにはめ衣ハれいさ事はなし
きれんとふんいおもひのへ了さきこゆまるへ
さまとうるよしとさうつよ角てを亜のて
去てふれい立あん心をもおもとふへき
りそをさとうき心ししをあさそうつまよ
あくの重ねてをとうそを同しうき世の
中ふそよ猶るりをやあらんと思ふ
今年佗ねかれのひつくゆへつつやうれしくよ
其ても念きなき身それやうよろふさと
こそしやふかうる東の端迄て佗車
さうよ乞て明ぬ程よと急ききめかせて
松子とさていひこ乃ゆとして二人とも

ひさお物まとしまうるへふといと急き
北へくさうひ出して中門乃ふてをと
御迎ひとつて乗るうち佐比浪つうとおを
坐てさせと命し別まるる
乃いつもと思ひつくしてあやしきを使
へおかふむやうれ心なきさへいおのの社を
うるおりあへまりまして世君乃佗恩乃
中い別とをとえわきまへおうとさつ大
とみ人乃つまよ神を思ひ祈り立つ応
ふれさいとうく諒もうそいてさる浦達よ
あつくうつる結るりわらん身ふおもえ
まてくふのころそてもこぬへきと哭し
すうをふきなり身にて移るへをる臭よは
しよ角くさ出かいおつと佗心を言ますと
にまとさてさひて鴨川乃堤さうる世か二
ひとりやう心ちをも志うそ〇と明離る
月初つまて子れいうこうこうとこのく霧
海こまてり出んをふんでとのへつまゆ

すんましてうこころをつくされねば棚なし
舟をこし沖よりてよるべ心ちしてあ
ふさきるはをわかまうこそ都のみ後
にやうこれて立なくもあらぬ亦子
はいまここ乃てかくまれにて木つきぬ
亦れ桜はこ西日さよ宿なさる家のゆ
つる里いなひさるけんひましとはなき
をしつひてさとの藤栄植なとしつら
ねつくゆひまうしくら薗てさる心のまへ
またやしろん人志第ての中乃つおまよおわ
しまらて方さくめりなき桜よおし
つきつのうまうらつく断く住なれ方ろ
こに森を尺を對るかわねおや我木つ
のさ每ふう角てみんまるあのてさいふの
きこ敢まそろ物しまさらめ柱よ
志てさつひさるくこんて忍乃沼よ物し
久んを憎てなく出羽吹しなん亦と
なかうしくいひなくさしまいらめこ

ちうぬく我て住つゐ心ちを志乃
やうくめなきてつまゝにいきれお
かまきなて涼をあやまれら角て涙
心を志つまゝりよ濃流て立ぬるひ
て此方怯すみんやゝ里のてひろき海原
乃浅まつひてうつひ物さる鴻乃く
つまかめなる舟れりつなと都にめつ
らきゆるひかなきいるくとみん淀
婦ひ近き名や葉えとひ吹なと心よ
つるりなくてつるなへ鄙の詠まつのこと
以風るうてをあるへしうくく清れ
くこ秋あつかよ松風や儘まへり
はつくせてこひきさる乃たなと
志のひやよ琴ひなくさめは琴い穿
とへるなてをわらここさよのきさるなして
松風なよひきたらせつ物しまい
まそ松つのつまなくて拾ささる人乃
此るかいうるかき中まをえもとま

かくてたゝきわ乃ことくなりしもその
ころもちゐ挽ことゝまて人〳〵わすれとこひ
ゆかしさる海辺き浦里なれハ風景記
よるなと波のさゝ此とうき乃たゝよふる
心ちしてあはれをさくさうものとはる
せちえ舟ありてあ舟のよひこゑハきよ
やさしめともやうれくさく影のき
筆ふも書尽しくさられとゆく
あるはうれさましめきて打ゆらくを
くるりてなれハうちくてなきりをも
なせてハおほくいこときとゆめよろる宮
祖乃ゐきをひやうつくしくころよ
月日さるまゝにへて立ちきさうを
此きさうをわらるれハ波
身をすらしあつきてハとさかく書女
人ハ枚なとくさうゆるきて百鬼氣
名をとゝまれてこふ波飛乃さしひなれ
に俤をへ乃うちうへてされハ春花

さもへなくおもひゆきて船ふ乗れたに
なひ果ていまつころのつきにつゝひ
つきの乃まきも立かなれとつとうひてん
なすまゝをの波さへ立つゝうちよせを
のふる心ちとゝるゝやられいさき浦白人
乃居乃縫よをなつまにたちとつきよはなお
あるりよつハあるさる浦君乃つるゝや
き綾乃ふせ(や)よりう望しはさせたつるゝ
天上乃つふあてこゝつ乃あくる乃よおち
ゆかるやうよハいるなる先世乃志すあ
またつわるに合歓のゝむかしなんとな
へてなきさわるてあの俤ともありま
すへて女郎乃春乃いつきけんやうよ
笠つきなきうろついさう志ありまくや
さこうわかねりさきときあとこつま
すは乃いふなをとこ此波さめとゆし
捨てゝなくと押しなかまもいふき
心をあつゆかしわつ俤ハ云をあと

はなれ七社乃御神をはじめ日本六十
余州の神々しろしめさる諸天乃力にも
まさりや弥生乃中比ちりすぐるき事
なりきりて出家ようしわすれ侍りぬる
事あれいふにおもひつゝ御世にかなふとまよ
はずることばやはぐ山に花乃面白き咲
こぼれたるを拝し給ひをしみ給ふ乃節
あらそふに玉乃ね人を祈てこよひ入
てもらへるに御父乃すまふ住しまゐら
て一天下のまつりごと事業ひとしく
たくはへる事ともあまりきこゆと思
志ゝ奉る名跡にすてしおもてえ
えたまふを心ちして仰ぐと雲乃上
仰るやうにかんしめ給ふ御息いとまろくま
ゆかしくさうらふちつゝ御身に寄ききす
人乃けしく白ひやの成ると花乃色
さへ折にまれぬつらきとめでつゝ
れいつくしきも御縁おもいとゆ

うしとおもひ此め女君乃一年乃こゝろ此夕
つる御まへに咲いづる八重桜の枝を一
入をかくさらしとおもわやきことなまりて
此ところきまし出家の思ふぞと御念一
はにをおきれつゝやう成打をしおもひ
まづくこひしくとひもひろむまつ
並信ある声乃とめこらし尼の花山の
花のさかりはとすんしみて左きをと
分きとて意に尼の花山穢をいとも
まろらはなかくさ式枚子ひつの
はなし人乃御身りとおもひつゝかゝて
下はのさまつゝし人をさうへゆし
世の中ある尼の花やまをもりこのとゆ
こゝゆるにこゝろも君のおもひやとに
思ひてしつゝうまつりなまゝてゆるを
人成らり
世のなさぶ小嵐や文人の尼の
きぬやき尼のゝ御ちまんたの山のゆきゆ
なきけりとてひなまきと打すませ

思ひあへてなきこころひとつを此三心の
清すきここのさとしつかるまゝ
てまてをともなくまかるともいへし
つかへし

志くま上総

志くれ　下

志くるゝころのあとゝなきさへゝは潜も
みるをも風乃さそふはあまねくさきと
つのとしまらし人〳〵は葉をとらまほ
松にそめけり鳥乃なかゝらすまゝひれん
心ちもし萌やとよりてなみて多くは
此宿はさふらひなれとも水のころ乃こ
心ちなれはかくしわたらせる人〳〵のの
さる人とそてもよろこまるこきさき
の船なさてはさやかはまもえさく出て
おのつからのはまぬおかやきにちく
志まきと心の中はひのせめ盛差
の中より住まつらん此語をもとめにまじ
うせられては夕暮はあやしうれ
経時にもなみもちて浪とさせし
心細さはこらさる法師かさまゝなゝおや
節めの患はえもしとを節さやしらかと
悔敷をも其あるまゝせんてこふくさ経ては

住まひし此語は流しせる人は有志とね投
もさらつる宿桂られらまとえなふは付
てを檀のころなりうせつて萌れてなつ
ん庵乃心ちも志のふとをいふきやこきそう
乃つとりは清てとさひ乃川ちされ
さるとえなるは百うらめうをこひうを
此心なれうちはそしてめてらつますたとの
きけらきしまら志のてゆ紀は
宵〳〵につもる枕乃露ひちやと
らそもこひの山とをすらんとの文
いうくろ隔ゆゆん旅衣ころ
も昔とそへる吾君古室傍らんと
結はつるそうすおわらひの紅
なまうてまのいかてはきさへの多
法師ほよりるきの山のひきなくや
隔りし人実書ふいえて宿年
わまてはいきしくさせのくさらんやいは
つはうしとかうしまる　はれあくてえん遊

しりんは心をえうらにかしられしかまつまはと
ともまにまきれてうめくれ忘きこし
させすに此比てさ乃女ゆうにとしも心さ毎っ
うち乃いまうしとをあ心を乃ふくろ
つまらうくしうれそ色ることに国乃ね無に
をひおつて無い中しう乃常に心乃宮人君
宮乃かきさいろにおれく此中将乃
君ともはことさりその乃姫君をおこ
しくさくひまそて将軍くひをうへてふう
す中宮を此御前ことおかなうつるそれ
こさこふをおりふうへとかさく心つ
くまふおかきさおくくいつ生をもはしま
こうちそれい前乃うのこゝみおりまう苦て
此前からうせさせすふさうるを此中将ハお
おなやきさ心ちろへさ生いまうてゆくんに
をなうせさかんとりわきこ乃は心いとおし
うて此比いうき乃程よをさみをゆゆうす
をふくしとこまもつ苦まを業まつ

よるひと夜さらふとあやしうりてふかうつ
うようし参りてふりふ誰よ心そく中
こゝよくあらとかつさとてをしまさしつ
おやき比おつうれをこ此しいさめまひてま
うてまひふんと此しろへいけようとき
へまて角入りまふ比ふひよ姫君こそい比
心乃光よいうまやをさつてむらんと
宮乃心ええとそくふよおひまあんう
乃便ふきわさし又は吉つまうこもか字
えおいつるへくるふと乃いとしとひある
ろやあらんとさおこりて常よりこ
こよ折ようひはうたをもてう娘吉め
てしはくろひておうさら宮ハ背ら
御命てかおれをきて比ふつくれハ寂
娘うさりて久しくあいまさらし程の
比物語つきすへきもあるとつくるよ云
つきしふ中将乃比心よいつくうをとめき
比さ母をみんとまゆうちと夢よそてをゆし

めさんは、つら目よりも、なさんと今はれと
光なるへと花人乃女をはなれまして、は
それと聞てなくゆかりを君に入ても
ぬつくらちあまりつるまひて誰をし酔き
こゝつは捨てかなとおのゝ打そを
まかなかし中将いつまとにもるこ
ろうちくよ将まへかくにても忘いろ
おもはせめて恨られし思てちちをこまを
まさんとたひ吹して志んてん乃てにわ
さゝせなくはこなりて乃からうわいつうしをち
ときをおかしんそてれは集まりまへき歌
をなしおなさ乃居ほとり吹乃つあまんて
さうしよつきよろうつりさるつふしなとすこ
志乃やうにかんてさゝるとやをつらさうわて細
乃いとらめわわ奥のつことのうきなるく
女君は山吹乃なれさるまうとおひ乃御
うそくて、とさてやつよいとろなるとめ
兄なる心ちて志なからぬとやん面つく

あまてかんまをあうと笑しなくは、いと名
つとおやしとやつさる扇子をゆうし空を
をあうこよいかんしすさうしまいおはしつ
しくさうまやとにのせと、へのあてなし
おとまつへてをあうとかんゆきいいうし
るうつとる旅よは宿まとひるひてさ詳
遣へさるつのまをあつねにいつかやとせしつ
へしてもいつてまきつてわさあんぬん
しくはことまうあまさらとてはやきこ
こゑらなと心はとみゆるとすまをの
やう成乃忘あつし扇におもてをこ
ときされとよやつとこかなるかんなる心
心まをわつさとけよりなさんおも海
にそてみんかひしに袖をつわさまくなる
心あさき女らしれさつひまへて鶴しは
こうのりさをなおとなつの成いつ詳
えんそてゆてそうなきせうつことさは
かけさらしついの年つうともあるん心ちらか

乃なをさらぬつらねとのさま〳〵なれしりまも
あると懸そさりひまゐらわさまれは
我とうをたるされそいと君皆うまへて
されなつさもうけまさいるなんとそめ
将乃乳母菊まゐらしをこゝろふめて参う
とひ昨日のありけれいしろうへのく深せ給
ちきらし時分ひ菊中納言乃姫君小の宮
まそかなせしいときさ姫君まう前まゐても
為うなつせきひしのこちりまとう深せさ
まひけめられい此ところ二月よりうちを
なくうせたるまりとうはいゑ乃人の咲く
待と請を咲てはの御使りまいらす
ん心ほとなくまゐつ云よ取植ひしと
朽なうる心ちらて物もいはれなかりけ○い
取りて人を咲くなきと淵乃さうらはさる
と思ひをあつと押のこひなふを乳母いと
おうてまつりやうくとりとひなれとみ
せも咲うやまかるとなみつる心つまると

さて咲ま〳〵いろ淵のなみかへのあやし
こかんとゝめんまゝろうくさゝまれ
んすりとこはとゝろきさやうまゝまてし
かつら四よ物のかなりけれいよやとゝとの
うそろりすゝみそていかせ成給氣色
といふまうやなまうりうこ心の影く
てまゐてまなる情のゆかしまゝらせされ
こゝ多とつまゝんとも志かゝらぬとちかき
うちと咲いまて深き心をとも立ひめ
くらさと川きるまゝる経まつき給はし
といなまつしとこつなん又こと文まゐ
咲くんをさ升よ話出なちて御の
へさまえ手てねやうよ世ひ深ひ
かゝりひあく浅き山まとの影て給い
しといふことちかとつ尊○まとい
さんなひなるの格経とうしての心
とゝろうりて様よりひ事て成めへ
きゝをつへき咲とゝとなひなせたつる

さりのあらんかうく人へめみやきゝ上坐
角てられ又い浮ふき、おやのいさめ
まゝてわすれつらんふうそしをひ
きらられんこう常のつゐのみかさ
うきしかふとらくふくてさこの
まゐ物れ志つうるゆへ我心つうふ
利しりのふまゐい二まてよとうそといゆ
つまゆうんこやきの盈まそふうう
いのつうられすくせよこうにいまさ
と人ぶ々きそてをいうつひあらへきこ
こうりをやえあるあちきるなとせしつ
へをとさもとうつよふのめうまをそ神さ
まり我心さいさをいさつうまニ忘
れをやられと人の根れちるゑさ
きい治の世まて乃わしまらんや
いとせんつうすくそうすそうはき
ぬくよ清やらつへきこそ類ひしい
ロするひふと義ま也 ふられ給て

東深きね覚よ此う鄰志乃悲しさそ
をいとあちきるく思ひまさらるも心
ち志まひつさらまた古やの無つきこ
こい志わとれしをめ於稽の住ゐ
まてい为ろ不よつともゝをよ也かし
あつともよ抱を待ふ陰用につき蒼えふ
おゑりす為乃妨の家にたとふかに
さうちそれ陰つきさ乃小あきにをし給
君乃やんことなき陰の野とせとよも
おちようちらん君にさうあつまかし
けまうやられむのとこまつふ心よりの
そあるまへましうんぞ世乃宿をほと物
こうと月りまうへておかしうつまゐて
の世いにらう旅よいつらんさ毎よ月
ともやつしそてらんみといふ思ふうそ
てをまふこを杖中の春喜文に集給
とく生るへてゆそてらうらよのをも
心りくるくゆ給はさらのにさうを
なりし人さ毎をしのふすまれ世乃悲を

をこと成れハまつりきたる月と世ハ
もの言ふ事御覧じしよりの大臣
乃三の君式部卿の宮の姫君なとお
ましましにはとかく成さ
にゆかりとつと侍るへくさなりにせる
へハ中将乃君もうとましきのそはき
らうかな青しらるなしらるとさてにし
うゆせさせ給ふかなと思ひまして今ハさく
いるくうちと思ひさうてみ中宮の御方
ゑさきへ中将のつくさせのひつくさる時の
按察乃もかともまかせ給ふかくへ御方
すゑ姫君をかしてひきならくさせたまへこ
こうまをやんるのなくさうと御生まとこ
やにてつくらとんなきてさいしさせたまふ
へにこうふ元分てまつりくさせまふから袖
雪もりちをに降する物うちのう雲
家のうへ海も中にちまうなりとまおま
へよいおのあたりの君達さい相中将按
中将なと川つきさうひかふおあわき

大殿の姫乃君梅つぼに三位中将さるね上
達部にハ中将源中納言なとつゝき
をことせ乃そく職ょそてえんしちきさう
めくとへうなれハ御琵琶箏なめりて姫の
君よ箏を弟くとせさい和中将ひく乃
上達に源中納言和琴二位中将横
笛乃中将さうの笛按中将ひちりき
き一派をつかまつりて二十五菩薩常
樂太平楽なと按ひきふかしにゃ
中らる弟あそひて上のへもとくさひまふ
程まりさうう指あかうされいうへハ中
宮のいおもとこつき殿の御方こえる
らせのふへて御もちまとてつくらく
弟つましくらハ中将の君紅の袴うハ
こきも田のあそうとうつくのさしね
きいるこやうて御まへ乃雪こし
く衣うつるやうくとあわてるふ
松のさとやきうてにまとやうよし
きのことおもくてさまさふせん

わたりて御階のもとにまゐりてさぶらふに
うへのおまへとゆふ雪の光
ことに見まさりて白きのめでたき昔の
名残なりけるうちにけんぢうひさしき
給はることのたびにとふらうものね
ひとりのおそまつりて大夜にて
めでたるひつおの御かたちよそせ
あさましきまでとあはれなるうちにひ
おもひのほか見えうらと仰ありやうわつ
つゝきそてみえつゝおもうと思ひ来と
ゆうまゆかしきまとの筆におぼえにな
つまれにさることしきのちと
えまうのさせられねとのひとへ
われよ人のおんそへつきさまを
とこにりとし春宮と神まう
さ聿の上達部らびまでも人
こうちまるゝみよしの中宮の
大臣をわかくし給へるくものうへのとう
ちまうれ女房などこともとやつまたの

障子のうちにさしいれ侍るを人々まゐりこ
まろうどの御分野なる側
よろ人まさりあつまりて女ばうたち
んなかにいろいろのきらめきたる姿
あらきらしあひけるさま見えて
思ふなる人あはれのこゝに侍る心
たまうをさへきよわかうらしき
様よ兵部卿の宮源氏ぞ侍る人の
てまふまめいたる歌よみまうす
つまにせ乃花やきなるうちまいり
ことにまうちまいりて中宮の御方
おもしろいひかれいうまへの御かたちせめひとつ
うくとふん宮もしらきれの御遊
ひまをおもうかるかれいおりねの笛
さららあそびもかゝはしらうすのね
さるとかなおもしろきと雪乃
心ち人々きてつれ参りてかへりけり
まおかわかこ位中将は兵部卿の宮
つまよのつきてものおもひなきとおもひ夜の

おつき様これハ宗風東ミさいはゐておは
くわしく御存ゆゑ中将さん
金之こなるこのゐ
乃たまふの月の光かり
さかしらやして清閑寺
まいつてゐへし此宮はいつまでもおり
未もとひやまたれと小の前の
呼おかさんのをいつてつまうかと
まてさくしの立るへきへともゆかせう
れめさとやとこの此きさまもさうけ
おかつきさのおもひいかにや、おつき
君へ夫乃思ひやつよ物ありうかうき
こうそりふへ乃衣の声なるひるとくら
くうえくとやうしらうさ面いとゆの前
せもうなき物の心さなかくてしらつ痛
き君をとそつこつ御さめをそこの
いふてあさくかうふ面よ云なわ
かまつてもあいなき物を思ふしも今乃う
雅まさもおつもりいはまとなとしかお

ゆふめ心ハなをあゝねゆ末衣ハまこうとも
つ前ふるしにハもちうなき宮のさまま
われらふ衣の前てつまうんとかるよ
を此てきいす見す忘れてさてこの
ゆめのうてよ心ともうとうくさうまひ
女へときてて清水のあくさむへきさてだ
あらねいつらりて豆のまよひしろさ
うしろの傍なら月の花蔭のまさへ
されい新月ひらつへと杉秋にちて
君へ今の前をとくめぬなうよいすむ
月の光を自あなさあくへんひまら
つまつろするもあはきとさくとえ
志るまつまきさるの風それんいとふと
すあるら御の今へしをうくてう今ひ
ぬらうくさこるる月りまうへてこと
せ忘ての修をあくおいよねするの恋
志きまらも新心のおこうかうよそて
さ弁いひらひかう悲うし生る
りんるの乃ふ新月のつきとや志つう

まかのゝかりつる事とおもふさへとは
にむかひてもおかれさまかはりて
あまて世乃ちりうきまき分野をもつるこ
ころはゝのおさせめなさめり
せつかりひえねまへすいとかまく
あらふあちまてる事をさちちち
ねかといふ事はかうこゝ心苦うせ
影くるゝ涙かゝ大かの尤かふとも
はきさちゆくおつまゝのもあると
さくつくつまもおゆひさめれは
やうまのをひつしき様まて立春さ
おふといふまうやといひ子と人をあるまへん
とと存事ふとまいらせさせすへとは
くれいる世をゆくしかりに事まる
乃き様乃名つはむる事しかるまに
らしとかれこまつ物うる御世中
にいつまめてさきへとてもはの契
まそ心をうん人の御合歸のまあし
きはちきめとせうこうとき事

に雑面物とつまゝ思ひられはかる恋乳
中のいとおきまゝ此あやまりのまて事を
すまて(?)かれね様の心さしとつまゝ御学
えんと深くせとまゝ影の名をもさうき
んとかわせんはとうまもてつらひくて
まきさらやさる心ちらんとくとしとか
のとあてゆへんれまとかとく宮ひまき
恐ろしとや角のことせひうる方るゝ
くて身をもつるかるにとてゐつ恋心
をは流れわるるは様まさくまはれは
はきをいつるのよのまつと誰も
恨心うこうして方まゝそきとむきさし
まふやんことゝきさここてら空られ
あちにとてもさて言事ひのんて
はのおかりつうむきす心よせんさ事の
人らまもうて御宮やうまの事うもせん
えかゝまさ〇まれいつまゐ山つ
つれあやまき物事とまてもつゆこれ
心とましいさるゝきまゝうとのきひゆる

してゐられ野将乃源なるをも一村為
ろうきやうそうとゝのはせるゝさきも
やみて兵蔘名ハりふつてハ井手れ下
常ときゝうれうれハわたしあらひろさい
もれそをさるけらひみるをやの
らんとえてさうまうのちまつよこしお
なちまうつのえとさうよ志まるゝ
をる しえのうつまていまさとうあるゝお
いきされるりると志まうこちまへるゝ
れいちうの一はさひまわされとゝ
めつきするらんゝおのつとめをあ
らせつひつるりともしらていひつと
へしきさいつるまぜん太子の世
のきまつてみつきこゝやまとらとこそ
つまのひろんやうようきせのさるとゝ
もろまゝやうくへうときくきるん
こちらのき心ともをやうとあさき
らえまふ杜の蓍つるゝおまへ乃なたを
きうるて其のまもをやうし ま

なきゝのくろうしさる揺えに擁とぞ詠おもし
てるのゝてれこひしさつきつゝねぬ
かいつまよみひつてきゝうのゝめかの
きまつて心むろうきタ蓍をしつまへ
つらこうてくさむわさなれいつまん山
里まうをさとつれね立志とさくて
急いつまうやうれ杉のさひさゝまひき
えんつて ゆるまつんをはわさしてつ求め
いつきまうとく かつまうへとそ は
はくるまよ常まの夜まあられともタへ
乃寝のえ袖をあこうふ
殊にも雲乃浅茅をかまへてそ
あるう侍るまゝ世の常まんてさゝ時ハハふ
もうきうきうこしいま常の紫ん常ハまおはし
せまれハ風まこされんを志らぬ身ふつ
らはのきのつれてゝさるまの と縁き
ゆさておわきさるさ心をとてこきあれ
まゝきつ縁くまんまことのたまさう
さくらてはのかしてま心を深んにいて

つまきてまいらせしこそさへ志かれと
與おこりて此師よ御すゝ僧都の一の
聖無ひてかくさういふる御心よりなんと
ていかのひとなんゆかしきをすさ宮ひゆる
すまいられん消息文れとひきを給
かくきりあすとて給はまさらう
宮せてゐるにおこなるかはやとさう心
なんよなるのの御ゆく松たてさると
へいらせて僧とものうせあるやきこ
こ乃まうすをと継あるさ角よてう
せさせてまいり乃古集御手御依
やさるへき為上人すと料角これつ
れ御作ゆれとあるなりよひてあ
ての志るへきさふひよあるとところつ
へたひしゆのひてよのまかきされら給
あらるいと志めやうよ松乃さるま申ひ
ともよの角さらこ御れおやし谷乃
みるなとしてさう御表まてうし
さるふ乃てさうるよ維のきさうる家

乃分野なよりやうも往御まゐらすゆ
して在世へまうくく善乃うき世乃中くく
に八宗雲乃よろよなるへくなんるくと
さとよ立之らん心ちを志かるを角
て廿日斗り様よ甚彼法文御し召て
いまとこをもおちもまと人されと都心
ゆとなく申されなれい使のひとまを
なく志やきるま小むるへきこえさせるい
すへてそうつよいとまこひのふと
すこし承りきるりを待られせ
て御心をあまり御て求めさせまて
るみ心あるく志されいさんしやて
まうてきこうして召をいさきよく心
乃あるのとをもすてき待らんいとこうさ
うときい御るの世をされ君とゆるへいま
さうく國乃御ま角まてさるうよよつ
く心を志めてるんいつまてひつくしう
よろしねわさと云なる世乃まの名残よ
てさうきをくてされるも老さるるをあ

きこえしさうしおんつれわたらせおはしますと無
常なき世にうまれあへるはかなさのなん
なんなきことをおもひとまりける物これ
とてもかくてもとくて月日を送ると
めつらしき此理をわきまへといふる衣を物
をのれ情をはなれてつ物まへてらん
なとすてておほくすくなく生
またこの世のまてさすまてゆしせつ
いとうつくしうちかくしき童さき僧都
成る衣をやうやう深て十七日の月さ
やうやうのおもひをうちきこし松
風さうにれまさるときやうしれあは
あはてていとかうと将に志してときさ
おされと恋の心に主乗なると志をて
すさひたるはいとをかしくなくて此志さつ
ゆくらぬつるひは物せんこよひの月
乃かけるやうきかはかなてる事をみてて
あと宮ひてさうなきき山にうちかれ
車をてるをひさせまひつ棒かそう

京のひとつる僧都よりをさうへきさて
さらは法師らも将軍の志をえ
にさらさせのふつまてよいにことなるにきを
まつ物のなせてへうをてまよ京されにを
もろうへしたつなをとらは山とと
乃さ西にわとまきすわやしききにふ
身をくるき心をまさらうはめすく一
へうやまれのひて従よいつてをと
わこゆくやはのもとてつきあると
そらみこうをまうせてらうんすめし
さをそうはのふるわたる月くまなくに杉
つたまれは車の志ととおしあおきを
てされとみくへもみきこちられかふ
打解のひつうつうみわつしき衣れ
遊き山たの中ちつわつて沖よう
浦まるみとりもこころをひるきふ
しきとみて志ぬうつよちい
さき無れこころもり西行の一つ龍
り宮のなきみぬかつとの詠之

ゆふかひてみちさしるのをすゝし
あさきり此夜ハ客中まてにえおほと
ましつ級といふところにおもて客死也
たうふんそておもひきとのを偽りま一壺
れなるたことおもひとへしこ定めかゝ
うちくさゝまかうあきとへさもし新かまの
つまかれらせて立升なう出へまい
外志賀乃句へをとかまかへにこゝろ
外里とおきわろそはれたてきらん
をあらねと松のありしのきハ昔ふう
乃声吹つさへ乃ん心ちへのすてさけ
ふれいすことめさせて宮ゝにえれ
まさきふつさき乃漂ゝよせてて此乃
こゝろ外之声信外へもあらしと
心おもうそて見都かへ此つらおもれ葉の
よいさうをあふつて者ふつ家ゐ
渡かうとさうよ立わてなゝ宮の隆
にとれ史のみかのかんて歌学
元生皆共感佛花とこうちおこる心志

のゆかせくさへ、名香乃さと匂ひま
さるなとなをくまいあつぬさ画口つさ
つるわさするを角む〇しうぬ墨乃
横なつる心つひいあるへきうし、なる
人乃捻せうらんとりらひ乃序に
未いこゝうつよ車をやせてこなさの
なさと見ゆてしるへのうと乃中志と
三一あおおてわつき女らう此乃序を
外さ画也奥のうさいいとくてうきいは
さ画とあやめをしわつ〇みてさう北祀
乃いつくゆふつうをさ画よくつきふ
らしさるつま音ゆなつらとゆの声よ
つくいきなしさるを衰いとらつよ
ひさるかいつる雨まそて一所やうまき
りつき独こゝとおもひのつまゝて柄
やらうんとへれとさ勢まきて此
涸を催されのひぬうちまいつき
いなると乃ゆくひてときしさき
乃逢乃此くさるをこやらよあるし

はのめちとやとうちてこひてめぐ
成るりうゑて気まこ此かつよ枕子
出いて立御さるいとたや・まよ
将哀すらうしてもやつるたのころ
罡てきるよ打え　さうつて此のき乃志
さよささまんれいつましくてのうき
せられと志てめるとめてことの隙に
ものこれい一向かんねへともしゑかりに
いふつさまいこのと弟とまひめてこう
まいらせ申やらんたかしかるとやさ云
こゑを弄いやつて此志きまのひつい・やし
うきすともいも思まきてとみつるう
とひをいつまりもせせ申比ちぬし
さありもそるる御めよあひかりそてに
ひらつらん有るのそてよ此ついまんせ
てゝ御硯かせてつこつき筆とたまま
さるまほさうつきにれ出へかんと
志のあ筆やるるあのるねと筆をて
たよ心乃いろへかくはすとつき

てゆるまふに女さん筆比つらしこむし
ごめさる御めよさいめでんともとさされ
す奥のてまつくれのひね罡いさされ
よここさらりにたんかまるのふて志かれ
とめ入りとめんとも志かるさと枕筆る
君よるもさまいゑしうかんてられたまう
さるまのようるやまのるとさ成果さ
まいとつまくしてえ筆ろまうしね
とふうつさまそて海つやきるのう云
のひるきるのよまゆての事うとまれ
たまうまのし彩弟れつこを此らあき
らめん籾出てこやさよのいせまへくおと
つらうこまりこまりうるるとさうち
あひてのゝ乃云ありつのひ
けるまりともこことやとせされ
将のめのされ志てせてさ成
事に掏をつかたれ
起よきこらしひて尚てさら
いるすくせ乃ちと前のわをせね

んへなみ申しをはなさんとなつり
なきさしのへハ世界はみなまて申し
さまいさまとすはつるる世をもいとし
かくありきとし年へとさて見つ人をも誰
故におもひなるとよいぬ命はあるなる
あしうを忘さまきねこさうのかうり
せしてもあきらうりよ縁のひよけると
のしあは心よ又いつ西北ひまうはの
こゑさとらるれともあまうられしい
つうてをへの了年月とみ人かあく
てさうらんよりさへの心の松もり
さ第なるをからり西なる事は
はつるるりおんとさきてしつをに
てきさひまつるにあさつるねおかといゑ
え侍るそもうし口口しよ申し
いさめ居きこゝなとも立あてよろこゑ
しきるりこ聞つまつるよなとてさ
やうにやもとらせのふ心よくさいめ
せさせみへとせめて申そうなとぬへつせつ

無事まてとやつしとこしへきこえ
さまいつうしてさいめ志のふさひ
にはおりあゑとゆうまきさ西よ逢
君のおも夢のとのさとさうよ
をわつまきぬ御涓うとめてさき此
種乃さ西おかのする〜し角てよきぬ
ゆゑんつる承よまつあもん名のか
さをにおうつ子それいさんやときさと
こゝろは御てのよろなるむろ御つうて
申しつゝきんいまのひねとさ宮へいさとつ
に此と比う打き人乃つやきゆく
よやるつさやき心をなくさめさゆく
きみとをゆてまを名は好る
なさまゆんるりの春よ心皆を仕れ
なんさ斗きてくとうえ心ひさまし
せろうさあ申し方へ取末つの
よりの森のて好色よしいめんせんゆ
申やみへハはつの斗光つもちてつへ
きゝ見なつさあん尼きさこう云

てかゝる人女ハやしきを棄しあるゆゑと
いふはりよまのうへんく石よきところこ
ろうこきゆるよとハいふよやさく
いかるとをよとふてあけしろ志を
まてさとうままいうまてちまうちみ
にうるしう若のあるよ此心を出て
て立族ひしもの悲んとるつおもひ給
うこ事をも首のちきうまゝまて甫お
かねさ為よ掃さうしと此世よ澱
あきとと動まうひまうとうまきつきの
常よ隠企つきてとおなまるよんこ
いハはようへんくさをふし又つかれ
喜やきふよそきさなまてを宮使
うしきて芸ゑくきしえまうてま
しきさと逝やき濁ままねて悩せんと
うこさちれおまうん心の中乃悼う
北ねよのをあくさるとちをといひうをと
へきと宣へいはつう懐中まき悟ねよ
これおもふまことといゆる成故ととを志て

すなはちあの枚子なんあやなゆゑわ水
志此くてうまれ出着つまを抱しく待き
てくるそうくき御分野まそひとの往
みよおしくろへたるまことといふやしきを
まてかんなまるをいまをくのうハ心
乃うちをも思若しく待されいさうこゝろ
気きき情を為まそ抱せさせまひ待う
いさつ情さめをもよろしうんと悼う
せうへきうりやいあるを此中まいと
なんうまきさうりへさうまとをも集比
ふくひまひてしと豆ひきく雑ゞのうん
うのをさうひよいうまうやおもひすらん
と流たふさひうひうんやあなう
うらんまてなし此しえきすこゝろを
あかうらんを心若きうるなうめつな
不老為をかんまひゐんよさまそすこ
うちをもあわしるとそまやうよ宣
ふあいもり不ゆうまてうつくきを
さくひなくうかんてかふかうるさとうよ

あんなふてこひつてんなとおもふにこそ
けふまてこそはいつ年とおもひやるを
いかう姫君はとの年とて了なる
むかしのつちを雛まてたのむなるを
わかしおれいとうかしくもとおもひ
ふしとも々ふ御車なとよ
うひさまてさらせ々さらよせ
御せんさうらふきへ乃御さためよに
こゝのもしきこるなきいさうおもひ
のゑしてよまんなよ御しのうくにこ
わか姫しくうんおひきつこゆへきやせ
けふおきて山寺のよあまておとし
うら姫君そつるとしま々お年と
おもひつるひてまゐらひとつきさし
てんさんるの乃こひつらんをさせ
つゐさ諸尼まとはしかへい寺を尼
をもふそうのひての年さるさき
おもふ野尼の高きまくらいいふあるな
つまへし尼きこえうたのむきたへ寺

かくしつねこせん祖乃ゆゑはて
読えんなりのつきわたされいて
のとくちらへしなよさうまうて
御せきとのんなりもいの年つせの
らんをこうとに云つたと福まなる
門乃御まつりまて患乃なやきは此文
えさまいさくめつせん寺き深を
まもおゝされいて文おひなるとて
をあつまへ読はさよ御のへなまる
もしこいはおもしくて志すんさきめの
さきくなれまなる尼し女君尚おはやの
尼きさいまうひさらもとなるのを
なきつるおもむきいかと此つとゝも
にうこ每もおもふねさきにもいと
まつねさる尼福しけなつ了尼寺
らそちへのやきまなくさ年て
わつまくこうと湖をえさめて
す女君を治雑をしゝなちなて浅
つくと御おひとく々つるうなるち切

こゝろしらるゝ人かなとさしおもひてこと見
比おやとさへおもはしつきやうちに
わはうすは付てをもあふさんのやい也いひ
ゆうんせすやう簾にゆうちさきすふ尼
をいとうすうておさまりしうとくら
のことききとにしひらうを見て
角心ゆうかするのゆへ立わ多も
をさるへきすとい云ふらいとゆぬ
くて物をゆうかとて女ちう思五六十斗
さうひさまいは車二まてよしありの
みなぬさめすてたちぬるふく車二つ
まさとい乃ゆうのりとゆうるかしこ
して東北とうこう絵おんしうの女は
はあくつさきあのし首のうとさへつ
けてとよ夢のやう成しせそ侍らん
しう子を史を程うきよる御まへ心をし
おもろの心せいとかくあやしうは人
おゆしよそうのすへてゆるしきふ
つらなきこるへきるすうくうきお

まうはむかひては舎人とさへいふは様
や弟まうとおきこしうすきくるを
中ゆうしく花子をゆうしひ
まふ君をも人志まとかくぬ風にを
ふひきゆうんとさそときもの
すゝ路ようし路さうとをまいふ
ことあらぬすうの内さうらむと
浅のゆ内をひて百り東北に要
あさとへまをもあうとゆうふ
床きことをもよろやきさ物にゆうし
まひてと比あまて古き離き
ほのせそゝへゆ心ゆうしめのそわの
そてうさしはひのすをふの
めよやいかひゆうんとふくさ斗
ゆてまふ志の石をさまへ
きしつらおわつうやうとゆうそ
色のふこやこれのつうすう侍りき
こめていとうまつきるすかはは斗
乃人とりふともさやうに心をとゝめさ

まつりことなとめしおはしまして心もとなく所
おとゝへ、はせまゐらせたまひてさきさき
いはつくしまうしはしめらせたまふ都に
おはしまして御のみてなをさせたまふやうは
こうしをはしめふよさるひなの人ちか
ちかきおほえたるみちはうれく
おほやけ御もちゐさせるの心つかひをも仁
して中将のつとめてもすえならて公卿
つかへしは、のへし、ゆう将の乳母乃
女房たちをうちかくれてこまかにも
て中将のきさのうけのうちを出家
て山科乃よのは御やくしてかくして
もとはうしにあるとてこゝ主計のかみ出
らせさまいはとなん思ひとくさひさ
まゐらせうよ女房たちのへいてもいつをも
しつのそ御やくれよ入世の中しをも
あるものなきいれあるねさあいなる
かるん女房なとなくつかさん衣もとも
てうちさせさせまいらせとも　おなしく

はつはしめんよりかくてもと堂
へいゆう将にとよみあきかたのみて月の
北野より此ゆの言のえならぬあはれし
よりなはこうあくまいりつきさまに
てとも御心ちつまんこたへをあつき
て怯ひ此中の事き山寺にまゐりたまふさ
れは思きさはいはまいりぬ文のやうせてお
ろさなは女房は中のくろちかへ御ほれ
帳よもて御ておもおほえと尼きこそ
對面しまいらせてよくおはする
見えてさうひなきこれきこえさせ
まいらせぬへきものよ御まゐりさせてさん
に御こそまいらせいたくのめでたき
ついつかやうれ御心なとよまてもいて
此御かんとものきと形をさひめそ
のつさめひ御もとの事へてこ哉
なく御身はなりて女房たちとさ
め御事よういふる墨染の袖なとをも
まいらせたまひてつくる乃御しを御を
つとめて月なかく御覧あそはせ給ふよ

ゆかしう思さるゝへといひてことゝ
えさらぬ女君はうちなけきたまひ京へ乃
こひしうてゆかしくのしまさせ
しきなれはかきりなくなんとゆかしくまいり
まうさきのふみちのはらうへまいりそこ
こまかなるこのせかきつけたまへるおとゝの
なかんひとりひとりきんちよろこひて
又いわかくのさまにまいりて御前に
源氏の御かたにそこうへきこゆるさ
せうへとりつまてゆかしうらうてかな
しいとゝやうまてかきこえはての
ゆきうら打やしれさるのまかめてさ
さるそとあのむすめかんなみとまいりて
ゆかしとさむらひうてく各々かさしさ
こゑえて京のよそのまいらまうと女君の
御車にはいか侍と尼君こういひて京
うち男君にはうら日暮ておもうくとも七
よきさ程の女車五六両やうやう廿
はきそいとゆかしきさ雨のつきま

京きんてんの西の對にはなほこうつ
くろひ女ちうちらうふと曹子あり
まく書つうひゆかしていつうして
へやちらふふこうひいとの方對局書
ゆかしうかへきはてもちとそ二人
よろひかしこて花のことくまきと
られてからきをまうさる御ゆらう
しかとゆかしうかやうやうまかりて
なふ葉の句ひのはうかたもみはか
うらき紅よる紫ふかきの御小
襖うちやのうちくるうきね
まちくさところは織ちしを召
てはやくとめてさきはすと
かさのうきさまはすへまつる
しらやきは白乃句ひさまを書
えんてさまそれよりて筆は
まうせぬまるへし中将のさる物京

かれしくて此年月とゝまされはた
我も又世乃物まさへなくは此世乃物
となし世にしぬとき我もまさつて見ん
ためには此類乃さし世にすて浮るゝ
成るれは倒の世つるゝと月なりける
またはりて此類なつかしうひらかうてく
如きうらいと我もまうのりうち梅しふ
こきそんなるとも梅乃墨但乃次る
小野對南のあはひてといふ分つ
ちうのもしのふさうして春秋乃詠よつ
くさう花鳥の句をもとめ見るには
立ちひある梅うつやきつひくてつき
をも故なしとはいふのをもしてしい
移るも和の音ににして世なるうかゝるふ今をせ
小ある梅うしとみてさうか見ん事てむ
すめてちの成りてつきつはれたらとこ
めの世やき前のまさうさ南まう見て

または音の木の前、志ゝろさは袖
つゝ子はちよなら〜のひぬ此一年紀
まさうる梅花大小の前をもうせさひぬ
れいとつれこと詠まふらるゝこの若
きまをよそあらひつゝなつゝ歌まひ
なかう梅いとうさうくしたらをまし
めでと梅ことよこひゆしなひしょ
めてまり待ゆて涙なくまろひ
まぬをもうこともも梅ゆつあまり
うすわちらつ二月のをちは露
いと深く立涙らくるよ南のひさしの
薦猶くゆなさせて打見濁なら
それと清海乃池の鳥うよちさき
当年世のまやうよ娘なて思の声
そうん秋の縁さへいかりひやうまく
しつゝと糸なつゆつる柳の志もひい
さう打それ力をも為まよさやうぬ

ともなふは吹うごきとめる春のあ
らしは白き梅のひとつ／＼雪とのを
散まかひさるさまこそふは御たれ
いたるかとつきかんまもこそなん
のとうちうかさて料むとあるぬ夕
くまれくとふいからかつきろ
詠やつまふは東の對乃らうみなか
かるや櫻まくまてか自私とかゆく
櫻の心をまちき程はなきちるを
さるをとえんつこの心のくまつ、
にこまろくさかひさるときさて
また中らうくこれ自せてさし
ねさる紅梅のしとさうさうれき
さるとあまつの人のよきくもてる
されかやと一人めとめつれ論と
これ行るまくらもまへとまてさつ
いはあかるひかとん物みつくさらしか

こさとうはさきとき花の結用とこ
香の深さ浅さなとくらるくしひか
まかしゆくかひまろ当のまる絲
うとさ物てにきわくて一枚に杉
らせまふあらみてこのとられつまう
いとこまやつよし西東乃海てとさま
いつ年はつとかせいらしとうく幸さつ
まて年月とうきの待ちすいのままや
しふくせんちん法心の本を杉らうき
こうくさやらるかうさとうは中垣乃
からうあるらしと申るさんるのに
へちてひつくしうやとさひかへてさう
こち世丹つゝみいこの花せんつはおかれ
ゆきまとくやふとあらて
詠くてあれしらつとも忠の花は
うしとはおもひやいとる女君は杉ちれ
ところまうまつる山ほのめてさき玉

のうてなにおゐてはさくミの心をあらはし
めてうつくしく仏のこゝろをあらはしは
咲うつろひのひて遊ひをまとゐと
まなかめの庭に花のまとゐを
色も盛をまつうへさかりの露はたう
咲こほれさる夕への世の常ならぬを
ふかめのひつかぬふれたりまさとかと
成なれく中将のやさしさもつかれし結
さる業平の物をはしへのこゝろを
おひやしらぬは此さめまことと物哀
よおもふことてうちあらふてこそ
うとけよこそ浅つゝとにひかなし
て縁よさやうなそのはえあるまじき
り来れすさへ彩きわたりつゝる
きひかれてとこひをもかれともよ
物しやつゝまてあやしきするまひで
るゝやきこえてとふゆへをしあると

鈴

立舞うゐ文あみてみかへりの附てさ
小と彩き流れて雅くいふ前やきと
ちのあちひかさきよたくれ半乃たれ
ひとなりしうし今はさる人のおや成
てたよと前まくん此の雅とさや
我よ彩をかくたれぬ宮世まて同
しるつゝひと成るりのとは縁よある
へきのまいあ業て一向よおぼれて
此身此よまていあやしう武さ成
やうかさされ前つゝのきこえう
我も此さる成世つとつてそ
さまの雅にもなくねとふかく
らむきて一つまこうとわつ結
歌をうくゝまさつとう同
くまのまたせはや家る
りんあてゝるまゆきてまのあるか
くるゝ月のまよ暁やかに夜ちし

てねひりまん國にやくる法は文
はたらうて花をてまちてとうとも
ゝつる法てりきにくまて衣かしこう
さうかれうし宮の掃よそとう露
くうみんてゝつる思ひ君うち忘をつ法
法そういうしふかくれときをるよ
なんしいつておのまつうまつるゝくや
とかつるゝいめつゝるなる法とよひ
まさるやんしかきまえいなとふかけ
まやとうちのまひつゝ法衣めよをた
てねやきさ法ゝこと申さまいは
うすをおまひわきはなつめみ君れかう
てつまおなるんさゝとこの花の香、
おもひわとれね稀ようん
世のうきをしらゝ年まいつてへ花
さとしよううまひるとくやきかく
さやまれきるみ竹堪てゝは筆れは

さゝ事ゝゝなんとやうて心の
さうなるゆうなんの法のそなてなか
やうせうへつらうやうまてさうやき
わるさきと申うゝ稀ゝ法さい
めんなうね法ゝ夢にゝなつかし
くゆてないゆうゝゝ世たなとる望
わつくゝ人わかきみの香をとこ
うつみようなきすゝ語るの思ひ
親人をもはつまさうなきゝおのつ
口をと心とやてきんちゝしれ
んのしこきてんまい秋の袖のつゝ
ちめつしきゝきえゝかひて
知りまいなといゝきゝたのこゝこと
いさき日まう世中ゆとうてまうこ
かうのきらうつしうつとくゝめ年
つま中宮の法ゝさたわきたとの字
こみるふかきうしつやゝゝかいとも

いとまうし春宮に世をさりきこえさせ
給ひてはれはれやうきをふかうたのんし給
さるやきみはなほはんなたんこれつわれは
まるならすは今し国をゆつり給
ひなんとて御門ねかはせ給
に此かたは御まうちきみ関白と
大納言のきさきにゆつらせて則内
大臣になりて中将のきさきに三位
まてなりて大将になり給たるに大臣に成給
ひとめでたく此内のおほい殿の中のきさき
にかくれぬるを見給きみは大将とも
こよなうしてはかのさうひぬるを
人はれとおもはせとといふもすなをきさ
なれんいふらむとてなにきこえ
たまはせ大臣の女のきさきにやうに
成給ふ御心のは御はかをてまち
うきつつわつらはんとつなか

きゆつのいとあはれまれきき給なつ
いたやさる年月よをへて此法いきお
いたの世なりなくひるなく成おはしま
すいつるさきの世の御すくせた
まつてるのきさきめしまさせまつれう
世のあへ物とゆしあいてうとうくう
の后うちすまの御物せさせたまひ
ていと昔うちさるはよ室へ物させ
まひて御あるひなとを侍なくとに
ここちをもあはれにたよりとおもふる
とあきにこころふて御よまなともし
せさせしつきかふ大将のきさきも
君たち二人はなることもなとこれ
をとなしくよはたゆきは母にもよ
てはなさてさせまふ母小の前いつくに
なさうなは侍なきしにまことあはつ
いはてるとりとしをおもはしかくをこ
きれおもとのこころ又すよ御かたと
て御としてのいろきいまの后と

さてもまた大将のきこゑ武蔵守の方
にこれをもちて物しける、その中より
つくしまでこし時年序ぶらんとはつ
ほしくひをとし志まへし四十あまり
なりけるにまりとさまでいとまま
く國にあんてかふかの武蔵守の方
むすめの葉てうとさせて年より
あふとてことしきまうすを出
てせさせ給ふ居乃こやくちのいおか
や弟さ母よ物せさせけひて五十ち乃御
清車御くちのみや其いりの上達
部乃ふそのうひつみくの御乃様に
とん志ちこのれふとをさいひふう
いとこともよ大将のきこいこ乃清ま
うめ乃るのしきよあうらひのふ
ふらるも物しとそてやよい末つう
しまうさせこめるひとるるてそさる
心のまへよ君ふちよまひふくらを
まふいとしあまよいくあるゝをとうこ
き

てもそつましや、いとうつをしあまちまね
いきつをそれうちぶかし、ともい山科の
御まで志のへにつきくるくくのこ
ち様におりのあやしくまうあるかと大
てるの深しきひてこまうなきるのく
おこまてうのゆそうち様へさそのふに
月の千りあまり名ともくのやま乃
行きをも一へふるぬ見まそて大ちやへ
もいともあるはるひよてもくてまふ
ある上達部ちん上へハぬるゝ人ふかね
きつゝあつゝいとことしおてかくし
よろまをみさいろうまつきてくる
さうしたちらひの出させて關子
ことゝくそまそて方わるすとうゝめさ
せまふ武部でのこやをもたゝまして
るのゆゆしめつゝはのすそ立て
ふくぬる不なやきはいゝるまゝ當
あるへつきとへまこれくそてをか
つふつると物しまふ行きあれつくへく

しひらのあをのしてさうまらもとをすこ
きこゑるにとききてうつくしき也御ふ
にひゝらして上手中にめでたくおぼえる
ふことはりなり武中なり乃やたれ
乃大将にはにる乃心をもあるる
これまことなるうつききぬにはれをと
うこくると屋きみくにうちとくうま
まつ後まて楷よとひうふ乃の是
さへのともやうなるそくるれ日新よ咲
こゝろまてるをみえまの名もち次さ
てさる御名をもおもくいてらは
雲井をもつねとうるくるへきひき
流るまさるきひく成ちとすさし
てうつるけるて華なかまつるるを
ゆきさとみてなつを近き墨ふの
あをきしうれをさしつきしてする
ひくさへさつきみれうきこへもしらん
しれてしきつしつまんなすゐさく心あ
よみわるさい御袖をしてたとまし

て大将をさしまをいつくもとこととみ御
乃人ゝにはなに御酒をおもふへ催つゝめてい
まきひぬ殿原の鼓吹こそ物まいに
てのちにはことうつちまひらに武池
ふ春鶯囀酒胡子輪鼓褌脱
手をとりしかふ入日に成り柱ゆの
ゝまさらつしつゝくる人楼の衣
あかいろなとつきてぬききるまとる袖
乃色あひ風よりうすくおもしろくのまうひ
いふ所に菩薩の舞くはへてかの方
まいあそふてことにこゝろこし御気ふ
やうく月さしくまるくたとく
小宮にかつるきあらうつうふる
こけよつまてまつてのふきあて又やうもこ
あらくまとなりきつる人のこゝろにふる
へむかひて東宮をそろしつゝ給ふ
仮 いかに成心乳母さへいとをかしくて
とう

寛永十六年三月日

志ゝ寄下総

右嫁女出之足者也

小村久助 生年十六歳

白露之系図

太上天皇

上巻にハ帝位にて下巻にておりゐさせ給ふ

御母中宮 大政大臣女

今上皇帝

下巻にハ帝位にて御子ハ数多の中

初東宮と云しや

兵部卿親王

御母今上同之

下巻まで式部卿と申る おはしまして

つまひ給てハ梅壺大納言の家に住給

御子一人いてきてまうけし下巻にてん

しろしめしての貴の家嫡てうとあり

若君

母大君 下ニ生

男宮

母后大臣女

下巻にて生れ給ふ後ハ東宮となる

大政大臣

関白といひ後ハ太政大臣にならせ給ふ

関白大相国となる

右大臣

元中納言にて中納言にて下巻に

関白内大臣任して末ハ太政大臣と

ならる

母ハ三やとこしろ山階宮と大将なる人

宰相の君

上巻にて蔵人頭とてしつ下巻

まて太政大臣のむこになる

中宮

今上の母后 兵部卿と同しく

女子

梅壺大納言と後の北の方 おはしまさぬの

装母 白露の君の継母下巻まてう

せのひし也 [illegible]

正三位左大将

元侍従にて上巻にて四位少将

母誰氏とも横川僧都の妹となる

故三位中将にて失せ給ひては
正三位右大将にの弟にて左大臣
白雲の君と申しし人也

大君 母大将同
さうの御の小宰相やしなひ奉りて
大納言の北の方にて後の小宰相の御
方と成りて法子むかへられ奥
まうく

中君 母同 こき殿女御と申しし人
上に奏して大将のきみ後に若
宮の宮とよりて下ひとつれて
とゝめひとつにし下にて東宮へ
参りてのちて男宮うまれ下奏の
まゐりて中宮にもなり給ふ
東宮の后にて法子其勢所生

母白雲のきみ 梅壺大納言女

男子
五六歳にて太政大臣の法子山科にて出家し給ひし

男子 母同
道をゆきしとき出家しにし

横河僧都 先祖之事
大将のきみにちかく侍し人にて大将のおもひ人にて
ありしこそ…うし僧都とあり

女子
大将の后 母 右大臣の北の方

左大臣 母先記
大将のきみを宮の御東宮法師にて出家
ありきこしめして御せうそこをしたまひし人

参議中将 母誰氏ニ云々
宮の御方にて琵琶引し人

権中将
同ときいちつゝき吹し人

女三君
…奏小春宮へ宮にて後弘徽殿小越前之人

四君
父太臣正三位大将へとられしかと白雲の
君ては…やうのきみはうらこひの
いてまうら御…しこちくと世
にいひし人

梅壺大納言 先祖之本
御の小の君ハ若中納言の娘にて白雲の
きみとうまれてうせてのち…のほの

此方ハ大相國のむすめにて上東子八月十三日よ
此家にて御遊ありし正三位大将まくさ
侍従よて笙ふきを吹きしをてめでたまひ
つかはさる笙を引出物にたまはりしへし上東
まで月まうでありけり

白雲の姫君 母右中納言女

正三位大将また侍従の時と此君を志よ
志めてたうやうに八月十三日のあそびのまきき
れよ大将よしめて思ひて此娘君よあひたら
ひたる程もなく此中をうらしよ大将の
きさらぎ八日の物忌ありける日民部の御許の房
まで女子のしのびことにまゐりきてもてなしつゝひさ
まくさうらしよ父の大納言をうらみ心ありく
してたくやりまゐらせ母のかの方よりくまれうらひ
家の内よりもえぬまゝと志ろしと云所へよあり
りて中二年ばかりすまひしよ大将こそ後ぬりけ
うとありわりときゝてあさゆふこひわたりあい
ていふの侍従へ急ぎうかひ御文を給りて
まゐりて志愛よりえうちあひてやりていさ
ひのかの御子ともし此腹よやちゐまふと

大君 母正三位大将とおなし 右大臣系図之人同之

右大臣の御女をさうる物の中宮やしるとてたさる
きこゆひとよりてわか御てにてつきうち
侍よ東宮にまゐりて御子一人おはしの大
将の君と名をそへたりしへすち八月十
三大納言家の楽よ大将白雲のきさきとて人ま
ちえたひしもこのひと

中納言 先祖の人 右中納言と云へし

女子

志らくもの君にたのみつゝやしへし男女の子多きに
おなじ大納言と中あはれしへし
志らくもの君の御母梅壺大納言の女の方
上東よまいらせまうしまゐらし

式部卿宮

それとかくらし

女子

上東よて春宮へまゐらる

源中納言

誰れにしと和琴の名春宮の御おぼえ
和琴の上手とかしへし

頭中将

同 笙をとこらもてさらに笛吹しし人

左近作

三位大将の後見

主計頭

大将比叡山まうでの供にて志賀より
さきへ出家し給ひし人

志賀之助　先祖不知

志賀と云所にて朝夕は世をのかれいとなみて
てありしは白露のきみと都に住うりて
さるべき山里にかくされしは杖子とはいひし
女志賀と云所へかくされしはありてなほとさの
こそなきさそまつりしとさういてありて
よみきはやしるひまゐらし人々子たちみとをし
杖母ありしうたこそ失さはせしこそう

白露君乳母　母志賀の尼

上臈にてうせてのちはしこそえら

杖子

父誰兵部正三位大将福の白露君にあひそめ
ひし事継大将めしよせてねんごろにまつてさひ
うひて久乃つてみとさうみこのひしし白露
の君とさへいさるひさうし也此女し

三手
二手
一手下
中下
三手